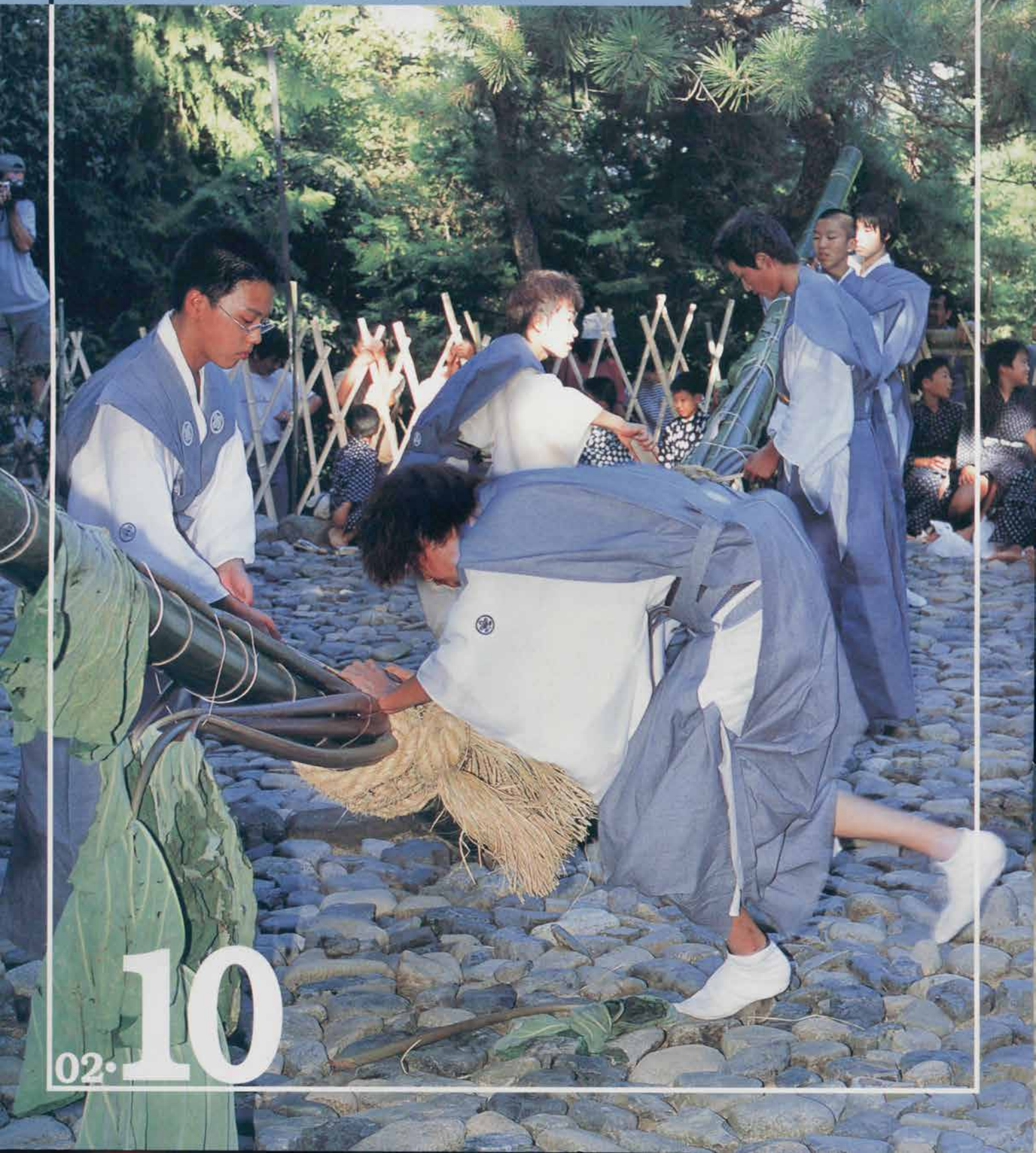


明日をひらく地域活性化のための情報誌

# 地域づくり

特集：どう守る、わがまちの宝



02・10

# 特集 どう守る、わがまちの宝

|                      |                   |    |
|----------------------|-------------------|----|
| まちづくり資源としての「宝」       | 岡崎昌之 法政大学現代福祉学部教授 | 4  |
| 銚路コールドマイン、唯一の炭鉱として始動 | 北海道銚路市・久保雅弘       | 8  |
| かやぶき民家集落「手這坂」を保存     | 秋田県峰浜村・嶋津宣美       | 10 |
| 出荷額一位だった生糸、操業に幕      | 群馬県富岡市・今井幹夫       | 12 |
| 農家が散在する散居村を守ろう       | 富山県砺波市・堀秋博        | 14 |
| 郷土芸能・真桑人形浄瑠璃を伝承      | 岐阜県真正町・廣瀬卓夫       | 16 |
| JR奈良駅舎、県、市、JRが保存決定   | 奈良市・南善嗣           | 18 |
| 捕鯨の伝統、文化守るサミット開催     | 山口県長門市・白石政人       | 20 |
| 塩田復元で後世に歴史を残す        | 香川県宇多津町・下山雅彦      | 28 |
| 希少動物、ヤンバルクイナを守る      | 沖縄県国頭村・知花靖        | 30 |
| 「ケラビア」どう守る、わがまちの宝    |                   | 23 |

## レギュラー・リポート

|                                |                  |    |
|--------------------------------|------------------|----|
| エコではなくエコへ                      | 山田啓二 (京都府知事)     | 3  |
| 過ぎ去りし夏の風物詩「ディスカバー「徳島の宝物」」      | 飯泉嘉門 (徳島県県民環境部長) | 22 |
| 変容する奈良観光                       | 坂本久美 (奈良新聞編集局長)  | 27 |
| 「e-ふるさと構想」について                 | 総務省自治行政局自治政策課    | 32 |
| アジアで初の世界砂金掘り大会                 | 北海道浜頓別町・岩本宏一     | 35 |
| まちづくり株式会社3Cが誕生                 | 大阪府池田市・田村智彦      | 36 |
| 全国地域リーダー養成塾修了者研修会              |                  | 37 |
| 地域づくり団体全国研修交流会                 |                  | 38 |
| 地域づくり団体探訪                      |                  |    |
| NPO法人なまはげエリア創造委員会              | 秋田県男鹿市           | 40 |
| 古河みこし愛好祭女会                     | 茨城県古河市           | 42 |
| 〈アンテナショップめぐり〉北海道さんこプラザ／あおもり北彩館 |                  | 44 |
| 地域だより／センター通信                   |                  | 46 |
| 都道府県漫遊／手前みそです                  |                  | 48 |

### 表紙 滋賀県白野町

#### 近江中山の芋競べ祭

丹精こめてつくった里芋の長さで農産物の作況を占う「日野町の奇祭「芋競べ祭」」が九月一日、熊野神社とすぐ近くの野神山で執り行われた。

約八百年の伝統を持つ同祭は、国の重要無形民俗文化財。中山地区の集落が東西に分かれ、この日の朝、収穫したばかりの自慢の芋を青竹に結わえて会場に。袴（かみしも）や羽織袴で正装した若者



が、ユーモラスな神事を繰り広げながら短い竹のものをさしを使って双方の芋の長さを測った。踊りを交えてとあつてなかなか長さが確定せず、見物客は珍しそうに見入っていた。

今年の勝負は西が二・五一対、対する東は二・一〇対で、占いの結果は「豊作」。漆器や薬売りの行商で栄えた日野は、近江商人の基礎を築いたことで知られる。町には商人館や往時を物語る古い建物が数多く残っている。

●文Ⅱやなぎ ●カメラⅡ小形又男

どう守る

わがまちの宝

市町村には、それぞれの地域に根差した、かけがえない「モノ」がある。

しかし、長い歴史と伝統を持っていたりも

時の移り変わりによって消え失せつつあるもの、

後継者不在で存続が難しくなっているものなど多様だ。

こうした「宝」を何とか後世に残そうと

行政、住民が一体となって取り組んでいるケースがある。

わが国では姿を消したが、

期限付きながら操業を再開した炭鉱、

廃線の危機にある鉄道を守ろうという運動などが好例だ。

今回はこのような事例を紹介したい。



捕鯨文化＝山口県長門市

古くから伝わる捕鯨伝統、文化を守ろうと  
まちおこしを目指しながら「くじらまつり」やサミットを開催



散居村＝富山県砺波市

屋敷林に囲まれた農家が散在する集落を保存しようと  
サミットを開いたり、全国連絡協議会を設置



### 真桑人形浄瑠璃＝岐阜県真正町

300年前から伝わる人形浄瑠璃を傳承しようと小学生から練習に励み、中学校には同好会もある



### JR奈良駅舎＝奈良市

奈良駅前の立体交差事業に伴い、駅舎解体が決まったが、古都の文化遺産を守ろうとの運動で保存することに



### 塩田復元＝香川県宇多津町

塩の町の歴史を残そうと塩田を復元し、産業資料館も建設。自分の手で塩をつくる作業所も計画中



### ヤンバルクイナ＝沖縄県国頭村

生息地が限定されている希少動物を、野生化したネコから守るため、全国でも珍しい「ネコ飼養規則」を制定



### 釧路炭鉱＝北海道釧路市

いったんはわが国から姿を消した炭鉱だが5年間という期限付きながら操業を再開。安全・高性能なSD方式で採炭



### 手這坂＝秋田県峰浜村

かやぶき民家集落「手這坂」保存のため、屋根の修復講習会を。ボランティア活動にはエコマネーを発行



### 旧官営富岡製糸場＝群馬県富岡市

日本近代産業の発祥地、旧製糸場の敷地では民族衣装パレード、大道芸などをシルクデーのイベントとして実施


 山田啓二  
京都府知事

# エゴではなくエコへ

来年三月に第三回世界水フォーラムが琵琶湖・淀川流域で開催されます。二十一世紀は「環境の世紀」といわれる中で、環境問題の重要な要素である「水」の問題について、多面的に議論がなされる国際会議であります。また、このフォーラムは従来の各国の閣僚が集まり国家間の約束事を取り決めるというだけではなく、多くのNGOやNPOが参画し、これまでの市民レベルの水にかかわる行動を互いに報告し合うとともに、今後の行動を確認しようとする会議であることも特徴となっています。

このフォーラムが京都を中心とした琵琶湖・淀川流域で開催されることは、これからの水問題を考えるうえで極めて有意義なことであり、すでに流域の各地では、この会議を盛り上げるための取り組みが始まっています。

この流域と水とのかかわりは大変深いものがあります。いくつか列挙してみますと、一つには、琵琶湖という天然の水瓶を関西の生命線として、京都という千二百年の都や商業都市・大阪の人びとの命や産業を支え、優れた文化をはぐくんできた地域であること、二つには、大阪湾から淀川をさかのぼり、琵琶湖を経由して若狭に至る物資や人びとの往来を支えてきた大動脈であったこと、三つには、京都は琵琶湖にも匹敵する豊富な地下水脈を背景に栄えた「水」の都でもあるということなどがあります。CO<sub>2</sub>P3（地球温暖化防止京都会議）における京都議定書の採択を契機として、さらなる環境先進地を目指すこととなったこの豊かな水の恵みある流域で、第三回世界水フォーラムが開催されるということは、気候と水の関係など、水問題を含む環境問題解決に向けて大きな一歩をしるせるのではないかと期待しています。

水を活かし、水を生活にうまく取り入れて暮らしてきた地域として、われわれは琵琶湖・淀川流域の豊かな水に感謝をしなければならぬと実感するものですが、一方では、ナイル川、チグリス・ユーフラテス川など、国際河川といわれる大河では、国家間の水を巡る争いは絶えることなく、気候温暖化が進む中で集中豪雨による国土の疲弊に悩む地域、渇水で生命の危機に脅かされている地域もあり、われわれとしては、環境技術開発などによる国際協力を進めていく必要があります。

このフォーラムでは、水と関連する気候変動、貧困、衛生、開発、森林など、多くのテーマが議論される予定ですが、国家間や地域間のエゴイズムに満ちた個人主義的な競争社会がどのような社会をつくり出していくか、もう一度今、二十世紀を振り返って私どもは考えるべきであり、二十一世紀は新しい世紀の幕開けとともに、エゴのこみ（濁点）を取り去り、エコロジカルな共存、共生の地域社会に移行すべきと考えます。この琵琶湖・淀川流域は、すでに幾多の経験と先人たちの英知を結集した地域社会を形成してきた実績があり、流域の個人や団体がこの流域のすばらしさを再認識し、生態系にも配慮しつつ、水質や水資源を守るため、府県域を越えた「流域思考」で地域社会を再構築する考えが必要なのではないでしょうか。

フォーラムを通じてこの考えを地域づくりの一つのコンセプトとし、大阪、滋賀の皆さんにも呼びかけていきたい。また、京都府の北・中部の由良川をはじめとする各河川の流域にも共通するものとして考えていくとともに、水を巡る紛争の絶えない地球上の各流域へメッセージとして伝えたいと考えています。

どう守る、  
わがまちの宝

# まちづくり 資源としての宝



法政大学現代福祉学部教授  
岡崎昌之

## 五つの方策

まちづくりを具体的に進めていくためには、五つの方策があると考えられる。それらは「保存」「規制・排除」「活用」「整備・拡充」「交流」である。

つまり、その地域で守り、育てられてきたものをきちんと「保存」する。地域に悪影響や害を及ぼす恐れのあるものを、徹底的に「規制・排除」する。保存され、磨き上げられた宝や資源を最大限に「活用」する。地域での生活に必要な不可欠なものを、熟慮のうえ「整備・拡充」する。そうしたことを十分に展開するために、地域内また地域を越えて「交流」する。これらがまちづくりの方策ではなかるか。

## 保存を中心に

こういう五つの方策の中でも、これからのまちづくりにおいて、最も重要なのは「保存」ということであろう。なぜなら、まちづくりの世界に

においても、もはや欧米モデルへのキャッチアップ型の時代は終わったからである。当然、欧米を無視し、交流を絶とうというわけではない。福祉や住宅政策、公共交通機関や地域スポーツの分野など、まだまだ参考にすべき点は多々ある。しかし、そういう分野においても、われわれの地域社会に培われてきたもの、蓄積されてきたものを、もう一度探求し、きちんと確認することから、まちづくりを始める時代だといえる。

また、地方分権化の流れの中における新しいまちづくりとは、道路や施設を、全国一律の基準に沿って、あれも足りないこれも足りない、と付加的に作り続けることではない。そうではなく、その地域にいかなる宝や資源が蓄積され、内蔵されているのかを徹底的に調べ尽くし、それを基盤とした、地域の個性あふれるまちを創ることから始めるべきであろう。

## 引き算のまちづくり

それらの宝や資源は、あるものは「近代化」

# 地域内で重要性を認識し、共有化を



古い市庁舎は市民の宝(ドイツ・ローテンブルク市)

の過程の中で、惜しくも破壊されてしまったものもある。破壊されないまでも、覆い隠され、見失われてしまったものも多い。これからのまちづくりは、次々にものを足し、上塗りしていくことではない。

愛媛県内子町の町並み保存、村並み保存を手掛けてきた、岡田文淑氏の言葉を借りれば「引き算のまちづくり」である。これこそ重要なのである。

つまり、厚化粧で覆い隠された地域の本来の姿や、地域が誇るべき宝や資源を、地域の人びとが改めて見だし、まちづくりの中軸に据えることである。またそのことが可能になるような仕組みをつくることである。

不要なもの、不具合なもの、上に塗り込められた異質なものを、一つひとつ取り除き、引き剥がし、本来の姿を取り戻すことである。そのうえで、地域の誇りが、地域の人びとによって共有化されていくことこそ、重要なまちづくりの方策といえる。

ただ「保存」を標榜することは、ともすれば後ろ向きで、消極的なまちづくりの姿勢と考えられやすい。しかし、ここで言う「保存」への取り組みは、積極的な姿勢なくしてはできない。転変著しい現代では、前向きで、積極的な姿勢を継続的に持つことなしに、「保存」することすら困難である。

こうして地域の宝を見だし、それをまちづくりの起点に据えることは、これからの地域づ

くりにとって不可欠の視点といえる。

## 何が宝か

では、このようにまちづくりの原点となる、わがまちの宝とは何か。地域にとって真の宝を見いだすのは、簡単そうで実はなかなか難しい。顕在化し、目に見える宝もある。たとえば古い町並みや散居村、産業遺跡、棚田、美しい自然といったものである。現在でこそ、これらは



街並み保存地区(愛媛県内子町)

多くの地域で、宝として認識され始めた。しかしこれまでの経緯を見ると、必ずしもこうした資源が、宝としてストレートに認識されてきたとはいえない。

古い町並みの多くは、不便で、使いづらく、汚い建物として、ほとんどの地域で取り壊されてしまった。取り壊されなくとも、看板やアーケードで、覆い隠されてしまっている。町並み保存地区として再生されたのは、ごく一部といっている。

また最近でこそ、サミットなども開催され、都市と農山村の交流の場、美しい農山村景観として見直されている棚田も、そのように脚光を浴びているのは、全国の棚田のうちごく一部のものである。多くの棚田は、耕作不適地として、捨て置かれ、畦は崩れ、草が生い茂り、廃田と化している。

## 見えない宝

見つけ出しにくいのは、形として顕在化しない、見えない宝である。人びとの記憶の中にしか存在しない、不可視の宝ともいえる。

地名もその一つである。現在進みつつある市町村合併においても、多くの地名が統合されるであろう。すでに合併後の新しい地名として、ひらがなや東西を頭に付けただけの、安易なものが生まれている。地名はその地域の文化的、地理的な特性を表してきたものである。いわば地域の文化財ともいべき宝である。

さまざまものの背景となっていて、見えにくい重要な宝のもう一つが、地域ではくぐまれ、磨き上げられてきた技術である。たとえば伝統工芸品は可視的であるが、それを作り出す技術は、ともすれば見えにくい。またそれを継承する後継者も少ない。工芸品だけでなく農林漁業、生活に密着した製造業、郷土食なども、地域固有の技術に裏付けられて、存続してきたものといっている。

しかし残念ながら、これらの地域固有の技術は、高度成長期にその多くが外部化され、地域から遊離し、消滅していった。各家庭で時間をかけて、昔ながらの郷土食や食材を作るのは手間がかかる。それをやめて、簡単に入手できる出来合いのものをスーパーで購入し、間に合わせてしまう。川や道を直したり、田んぼを維持したりといった技術も、多くの場合、大型化し、地域から遊離してしまった。

こうした記憶の中にしかない宝も、現在では、消滅し、復元できないものも多い。しかし辛うじて、細々と生き延びているものもある。再生可能なのはここ数年といった、危機的なものも目にする。

こうした技術に注目するのは、ノスタルジックに昔を懐かしむためばかりではない。これらの伝統的な地域技術のなかには、たとえば環境という視点で、世界的に評価される技術が内蔵されていたり、発酵技術のように、将来的な可能性を秘めた技術が存在していたりする可能性

## まちづくりに 宝をどう活かすか

見えても、見えなくても、それが宝だと地域で認識し、その宝をまちづくりの中核に据えることは、それ以上に難しい。しかし、なぜこうした優れた地域の資源が、一部の地域では無視され、ほかでは宝として注目をされ、まちづくりの中核的存在となってきたのか。

それは多くの場合、その宝の存在意義に気づき、意味を見いだし、その重要さについて、他の人に熱心に説き続ける情熱を持った人がいたからである。その人は、地域内の人のこともあるし、外の人の場合もある。また、そのように宝を見抜いた人たちの足を引っ張るのではなく、その周辺で支え、勇気付ける人の存在も重要である。これらの人びとも地域の宝としての「人財」なのである。

しかし最終的には、地域内でその重要性が認識され、共有化されなければ、地域の宝にはならない。宝を守り育てるまちづくりにも展開しない。

このようにして、宝を地域できちんと認識することは、古い町並みが、美しく発酵した風景となるか、醜い腐敗した風景になるかの、大きな境目ともなるのである。まちの姿は、現実的に映るものだけと考えられやすい。

しかしわれわれがどこかのまちを思い出し、語ったりするとき、それはわれわれの記憶の中に存在しているまちの姿である。まちはコンクリートの基盤の上だけに作られるものではなく、われわれの記憶の中に創られるものが多いからである。

## ある物探し

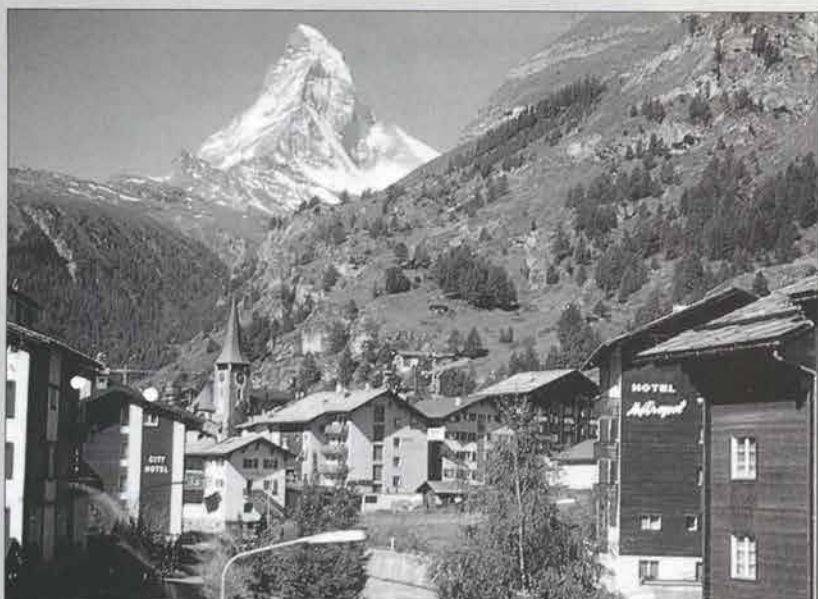
熊本県水俣市は周知のように、公害で痛めつけられたまちである。水俣という産地名がつくだけで、産物も売れなくなった。地域を取り巻く環境で、マイナスのイメージになったのである。地域の宝などはスッ飛んでしまった。そうならば、マイナスの上からもう一本環境という縦の線を引き、マイナスをプラスにしようとさまざまな取り組みが始まっている。

水俣市は一つの独立した水系から成り立つ町である。水俣に降った雨は、市民の生活にかかわりながら、すべてがこの川を通じて、水俣湾に流れ込む。危険なヘドロを取り除いた水俣湾を、再び自分たちの生活廃水で汚してはならないと、地域全体を水系で見直す作業に、住民が取り組んでいる。

まずは水系の中に何があるか。子供は川の中で遊びながら、魚や昆虫など、そこにある物を探す。お年寄りからは、昔の川の姿や生活の中でどのように川と接してきたかを聞く。川をさかのぼれば田んぼに通じる。その先は林や森に繋がる。田んぼの周辺にはどんな花が咲いてい



地域の宝は子供たち、子供たちに木造校舎を(熊本県小国町西里小学校)



市内から市民の宝マッターホルンが見える工夫(スイス・ツェルマット市)



ガラスの分別収集(熊本県水俣市)

るか。林には何が生えているか。徹底してそこにある物を探していく。

宝と言えどどこかよそよそしく、他の人に自慢気に誇るものになってしまう。水俣のように、とことんまで追い詰められた地域では、とにかくそこに何があるのかを探索するしかなかったのである。

これこそが水俣だ、という物がどこにあるのか。そのことを徹底する中から、水俣の人たちが掘り出せるものが生まれてくるに違いない、という考え方と行動なのである。その意味

では「ある物探し」でしかなく、そこまで徹底して、水俣の水系を調べ直している。

## ゴミの分別収集

そういう運動を幅広く実施しながら、環境マイスター制度を設け、市民の間から環境モニターを多数認定し、その人たちが商店街やスーパを回る。店の環境面からの評価を市民が実施している。この積み上げの上に開始したのが、住民参加によるゴミの分別収集である。現在では生ゴミのほか、二十三種類の分別を実施して

いる。

中でもとくに力を入れているのがガラスの分別収集で、特定のブランドを建設して、ガラスだけで六十四種類の分別となっている。製瓶メーカーにいわせると、水俣のガラスは正確に分別してあり、ブランド品だという。こうした地道な「ある物探し」から、とうとう宝が出てきたわけである。

地域に密着し、生活に密着する中から、宝を模索する。その宝を現代の地域生活に活かすことから、宝を守ることができるのである。

どう守る、わがまちの宝

# ① 北海道釧路市



知人貯炭場と船積場

とくに昨年は、ロシアの漁獲割当にかかる入札制度の影響で、水産業が壊滅的な打撃を受けたほか、釧路市農業協同組合の経営破綻、地元スーパの倒産、外来大型店の撤退表明と、地域経済にとって大変厳しい一年だった。

## 太平洋炭鉱の閉山

そんな中、釧路の石炭産業を担う太平洋炭鉱(株)が、太平洋炭鉱労働組合に対して閉山提案を行ったのは、年の瀬の十二月七日のことだった。その内容は、平成十四年一月三十日をもって炭鉱を閉山し、従業員一千六十六人を全員解雇するというもの。提案どおり閉山が決定されると、関連企業を含めて一千五百人もの離職者が一度に発生することになる。

また、七年に策定した釧路市産業連関表を用いた試算によれば、太平洋炭鉱の石炭生産の波及効果は、生産誘発額で三百四十億円、就業者誘発数で二千四百人、人口誘発数で六千人となり、市および市民への影響の大きさがうかがえる。太平洋炭鉱の閉山は、まさに地域経済の根幹を揺るがす非常事態になった。

太平洋炭鉱(株)の操業は、大正九年、木村組釧路炭鉱(春採坑)と三井釧路炭鉱(別保坑)の合併により始まった。軍需景気を軸に昭和十年

初期、石炭の好景気が訪れると、同社は機械化採炭へ取り組んで生産効率を高めるとともに、石炭を港まで鉄道で運ぶことにより輸送の効率化を図った。港は石炭であふれ、それまでの木材にとって代わり、釧路は石炭の積み出し港として有名になった。

昭和二十一年には春採坑海底下採掘に着手し、海底下炭鉱への第一歩を踏み出した。二十五年以降、朝鮮戦争の影響で出炭量は増加、翌二十六年には戦後最高出炭量の八十一万トンを記録した。

## 技術は世界的レベル

その後、三十年半ばにかけてのエネルギー革命を転機として、国内の石炭企業では合理化が強化され、縮小を余儀なくされた。そんな中、太平洋炭鉱(株)は坑口を一本にして、「二社一山一坑口」の合理化を完成。機械化にも積極的に取り組み、四十四年以降は年間二百万トンを超える出炭量を安定的に維持してきた。世界的レベルを誇る技術力を駆使し、海底下に深く、静かに眠る石炭を採掘してきたのだ。

しかしながら、海外炭との価格差の問題に加え、自然条件の悪化に伴う生産量の減少などさまざまな諸条件が重なり、太平洋炭鉱は本年一

釧路市は、北海道の東部、太平洋岸に位置し、背後に釧路湿原国立公園が広がる雄大な自然を有する東北海道の中核都市である。

これまで豊かな資源を背景に、水産業、石炭鉱業、紙・パルプ産業を基幹として経済的發展を遂げてきたが、近年は、年々厳しさを増す国際的経済環境や長期化する不況、景気低迷の影響を受け、これら基幹産業をはじめ各産業分野において先行き不透明な状況が続いている。

# 釧路コールマイン、唯一の炭鉱として始動 三本柱の経営方針、課題は新産業の創造



釧路市商工労働課主査  
久保雅弘

月三十日、釧路での八十二年の歴史に幕を下ろし、閉山するに至った。

太平洋炭礦(株)が閉山を提案した十二月七日、市では庁内対策本部を設置した。連日連夜にわたって諸問題の解決に奔走していたころ、「炭鉱の灯を何としても消さない」という市民の熱い思いにこたえ、地域経済への影響を心配する地元経済界などの懸命の努力により、太平洋炭礦(株)の事業を引き継ぐ新会社「釧路コールマイン(株)」が設立された。閉山提案からわずか半月後の十二月二十三日のことである。

## 採炭量は三分の一に

釧路コールマインは、太平洋炭礦(株)と関連企業を離職した約一千五百人のうち五百四十人を再雇用した。ヤマの呼称も、国内最後の坑内掘炭鉱として「釧路炭鉱」と改め、本年四月九日から採炭を開始している。太平洋炭鉱時代と比較して規模は三分の一になったが、年間七十万トンの生産を目指し、炭鉱の灯は再びともることになった。

同時に、釧路コールマインは、太平洋炭礦(株)から、国の「炭鉱技術移転五カ年計画」に基づく研修事業も継承している。これは日本が将来にわたり、海外から安定的に石炭の供給を受けることができるように、世界的に優れた国内の坑内掘技術を海外産炭国に移転する目的で実施されるもの。本年度は、中国とベトナムから延べ百五十人の炭鉱技術者が来釧し、釧路炭鉱をフィールドとして研修が行われている。

この事業の実施は、国際技術移転協力を通じ、地域として国際社会に貢献することにつながるものだ。また、東南アジア諸国との産業分野における交流の推進によって、石炭産業をはじめ地域の産業の新たな発展方向を切り拓いていく契機となる重要な事業であることから、その円滑な推進は、市にとっても重大な課題である。

## 交流事業推進会議

このため、昨年六月に、関係機関の協力を得て「炭鉱技術移転五カ年計画市民交流事業推進会議」を設置し、研修生と市民との友好・交流を深めるため、軽スポーツや地域イベントでの日本文化体験など、各種事業を実施している。

研修生は、見知らぬ土地で生活する不安と、

国際的研修事業に参加して研修目的を達成するという重圧感を抱いて釧路に来る。この不安を取り除き、重圧感をやわらげて、快適な環境の下で研修に参加してもらうことが、この研修事業の成功のカギを握っていると確信している。

釧路コールマインでは、この研修事業と石炭の生産・販売、廃棄物中間処理を三本柱として経営を進めており、現在は、採炭・掘進・保安などの優れた炭鉱関連技術を他の産業分野に応用していく取り組みや、環境リサイクル事業など新規事業分野の開拓を積極的に進めている。

釧路コールマインの設立によって、太平洋炭鉱閉山による釧路地域への影響は緩和された。しかし、地域経済は依然として厳しく、また、太平洋炭礦(株)と関連企業の離職者のうち約九百人がまだ再就職できない状況にある。このような情勢を鑑みると、新たな雇用の受け皿となる新産業の創造が、地域にとって緊急かつ最重要の課題となる。このため、市では「新産業創造等事業検討委員会」を設置し、新たなプロジェクトの事業化可能性などについて具体的な検討を始めたところである。

これからも、新会社設立で見せた市民の皆さんの力を信じて、地域産業の底上げと地域経済の活性化に資する取り組みを共に進めていきたいと思っている。



春採斜坑人車



研修生と市民との交流、  
長ぐつアイスホッケー

どう守る、わがまちの宝

## ②秋田県峰浜村

峰浜村は秋田県の日本海側北部、青森県境に近く、ブナの原生林で世界自然遺産に登録された「白神山地」の南山麓に位置した稲作と菌床しいたけを主産業とする人口五千人弱の小さな農村である。

## 日本の原風景

**手** 這坂は村の中心部から六〇ほど白神山地に入った山間にあり、水沢川の川縁に昔ながらの「かやぶき民家」四軒がひっそりと残る小さな集落だ。

今からおよそ二百年前、北東北や北海道を中心に旅して貴重な資料を残してくれた紀行家・菅江真澄が手這坂を訪れ、その紀行文『おがらの滝』の中で桃の咲き誇る様子を中国の「桃源」のようだと記述し、綺麗な絵も残してくれた。

ここに誰れせ々々桃にかくろひて  
おくゆかしげに栖るひと村

この手這坂には現代人が忘れかけている日本の原風景が残っており、ここにいるだけでホッ

遊休農地を利用した「手這坂農学校」



ころ、村の新しい総合発展計画を策定していた審議会で、都市と農村の交流の拠点として手這坂の活用が課題となった。

村からはかやぶきの維持が大変で、将来の村負担が心配されるという考えが示され、手這坂の活用が削除された。

ところが、地元では白神山地ブームなどで都市と農村の交流が進み、産直施設は好評で、最近では世界遺産に隣接する水沢山への登山客も増えている。

こうしたことから村は昨年三月に手這坂の状況把握のため、大学の専門家による建物調査を実施した。

文化財面では特記する建築群ではないものの、四軒がそれぞれ違った造りで集落全体がか

とする。

しかし、車社会が進み冬の不便さのために次々と里に移り、三年前には完全に無人集落となった。

ちょうどこの

やぶき屋根という点で全国的に極めて珍しく、再生と利用を前向きに考えるべき、とのアドバイスを受けた。

このことや桃の花などが度々新聞やテレビで報道されるようになり、うち一軒が所有者の親族の好意で屋根が修理された。

## ボランティアの活動

**そ**して、地元の県立大学短期大学部の学生たちが、連休明けから毎週のように手這坂を訪れてはボランティアで家の周りの草刈りや、家の内部のかたづけを行うようになった。

建物の内部は畳が腐り、床の敷き板や立ち柱も修繕が必要で、素人の力ではどうにもならない状態だった。地元の大工組合に相談したところ、快く修復を引き受けてくれ、休日を利用して多くの大工さんが修繕に参加してくれた。

その後、古い畳を運び入れ、囲炉裏も再生してどうにか使用が可能になった。

本格的に再生活動に向けた組織づくりの必要があり、集落の地主や村職員・大学・有志によるボランティア団体「手這坂活用研究会」を昨年の八月設立、会員十一人で発足した。

活動は二軒目の屋根の修復を講習会という形で実施し、ボランティアによる再生活動をスタ

# かやぶき民家集落「手這坂」を保存 桃源郷再生目指しエコマナー発行



峰浜村企画開発課課長補佐  
嶋津宣美



年齢もさまざまな「かやの刈取り」

ートさせた。

このほか、かやの確保や桃・ブルーベリーなどの果樹木植樹、草刈り、麦まき、雪かきなどを行い、村民にこうした活動内容を知ってもらおうと「活用計画書」をまとめた。一連の研究会の作業には約三百人が協力してくれた。

研究会では、村による事業化は難しいとして、民間ができる範囲のことを、民間の力で手這坂を後世に残すとともに、活動を通して交流を促進できる人材を育成することを目指している。

その後、メンバーには老人クラブの会員や菅江真澄研究会の会員、大学生や教職員、村民が加わり、現在五十人を超すようになり、地元の学校もかわりを持つようになった。

今年の活動では、昨年に引き続き、民家の再生を中心に全戸の早期使用を可能にし、周辺遊休農地の復元を目指している。

## 二種類の地域通貨

今

年の春からはボランティア活動をより楽しいものにしようと、手這坂だけに通ずる地域通貨を導入した。これは桃源郷にあやかり「桃源」と命名し、再度ボランティアに参加したくなるよう工夫した、手這坂だけの制度である。

ボランティア活動に参加した方には一日の代償分として「千桃源」、半日では「五百桃源」の地域通貨をそれぞれ発行している。

ボランティアはたまった桃源で手這坂の好きな民家に泊まることができる。また、郷土料理「だまこもち」をご馳走になれる。このサービスは家主さんから受けるが、研究会が最終的に家主さんに経費を助成することになっている。

将来はこの桃源で村の特産物と交換したり、公共施設で入浴ができるようにしたいと思っている。

## 周辺環境の整備も

今

年は手這坂の周辺環境の整備にも力を入れていく。日曜日には遊休農地を利用して「手這坂農学校」を開校して、昔風の米づくりも体験できるようになった。

春の桃の花に加え、この夏にはホテルも手這坂の名物になった。

今は水路を整備して手這坂がホテルであふれ

ることを夢見て、地元の小・中学校から大学まで共に協力して活動している。

また、使用可能な二軒の民家については、この夏試験的に研究会の関係者に限り宿泊を受け入れた。利用件数は少ないものの大変好評だった。首都圏からの森林ボランティアの活動の拠点に、世界遺産地域への散策の宿として使ったが、とくに子供たちにはホテルや川遊び、星の観察などで大変思い出の多い夏休みになったようだ。

秋の活動も九月から再開された。屋根の修復、遊休農地の除草、稲刈、水路の復旧、桃や果樹木の植樹、かやの確保、そば・パン作り体験、民家での大衆演芸の公演など、まだまだ手這坂の再生活動は続く。

一方、集落の再生、活用にあたっては、①土地や建物の税金の負担②光熱費の負担③建物の維持・管理④活動資金といった問題がある。半面、①遊休農用地の有効利用②新規就農者と定住の期待③宿泊、文化活動の場としての活用④村のイメージアップといったメリットも考えられる。

要は再生することで、手這坂を残すことが先決だ。

活動資金にこと欠いても、ここが好きだから、元氣とパワーで頑張りたいと思う。

いつもにぎやかに、楽しく、皆でワイワイやりながらアイデアを出し合い、再生に一步でも二歩でも近付けたいと思っている。

どう守る、わがまちの宝

### ③群馬県富岡市

## 養蚕製糸の発展過程

**富** 岡市は群馬県の西南部に位置し、古くから「甘楽野」と呼ばれるところ、温暖な

気候に恵まれた季節情緒豊かなところである。

まちは徳川幕府の御用砥として砥沢村（現南牧村砥沢）から産出された砥石輸送中継地策定のために新田開発された町割りがほぼ完成された元和三年（一六一七）に初めて「富岡」という名が付けられた。

町は上・中・下町からなり、各町では月三日の絹市（合計で九日）が開かれ、近郷近在から絹や生糸が集められ、富岡は西毛地域の一大絹市場として発展を続けてきた。

## 官営製糸場と甘楽社の設立

**明** 治政府は幕末以来の生糸の粗製乱造を矯正し、器械製糸技術の啓蒙を図ろうと模範

伝習工場の指導者としてフランス人技師ポール・ブリュナを迎え、その指導を受けて明治五年木骨レンガ造りの官営製糸場を設立した。まさに日本近代産業、製糸工業化の第一歩であった。他に十人ほどのフランス人技術者を製糸場

の指導者として雇った。

当時、交通の便の悪かった富岡町に模範製糸場が誕生した最大の理由は通年操業が可能となる原料繭の確保が十分に保証された点にあったことによる。

模範製糸場には全国各地から工女の応募があり、新しい製糸技術を身に付けた彼女たちはやがて地元へ戻り、器械製糸の伝導者の役割を担ったのである。その代表的な女性として『富岡日記』の著者で旧松代藩士の娘、横田英などが挙げられる。

一方、富岡には官営工場の創業とは別の角度から眺めなければならぬ甘楽社（組合製糸）が産まれたことに注目する必要がある。

元来、養蚕農家は養蚕・製糸・機械織りという一貫作業が原則であった。たとえば江戸時代の富岡における絹市には繭という段階での商品は皆無だった。少なくとも養蚕と製糸は未分化であった。このことは、富岡製糸場はある意味では養蚕農家の一貫作業を分断する働きを持っていたことを物語っている。

旧来の慣行の中で弱小養蚕農家が海外からの生糸の大量需要にこたえるため厳しい規則の下で良質な生糸を大量に準備しようと組織したの

が甘楽社であった。明治十三年（一八八〇）に富岡町周辺の十三組の農民組織が結集して生まれたのが甘楽社だが、この二年前には安中町を中心として碓氷社が誕生していた。明治二十六年に甘楽社から分離独立したのが下仁田社であり、三社はやがて県外にも加盟組織を持つまでに拡大発展した。

## 異なる製糸技術

**製** 糸工程は官営富岡製糸場が器械製糸であるのに対し、この三社は旧来からの座繰製糸を踏襲し、これに揚返工程を加え生糸の均一性を厳密に規定して主に米国向けに出荷した。

自製繭を自家の座繰器で製糸したうえに共同の揚返場で処理した製品を本社に出荷する工程を経た組合製糸のありようは、直接的に養蚕製糸農家の富を蓄積させた。

製糸技術の異なる官営富岡製糸場と、組合製糸とが競合できたのは、当地方の原料繭の生産が十分に確保できたことにつきるのである。

さて、富岡製糸場は所期の役割を全うして明治二十六年に三井に払い下げられ、十年ほど稼働した末に原合名会社に移譲され、さらに昭和十四年からは片倉工業（株）富岡工場として生糸生産を続けてきた。この間、製糸機械の変遷はあ

# 出荷額一位だった生糸、操業に幕シルクデー、外観説明会で検証



富岡市立美術博物館館長  
金井幹夫

るものの建物の主体部は創業当時の木骨レンガ造りの建物をそのまま利用し続けられてきた。

かたや組合製糸の甘楽社は直営工場の設立や原料繭での出荷という近代化を図ってきたが、昭和十年代の緊迫する国際状況は国外的には生糸の国際市場を失わせ、国内的には食料増産が桑園を縮小させ、やがて蚕糸業統制法の施行に伴い蚕糸統制会社の傘下に入ることになった。すべての製糸場が昭和十七年の日本蚕糸製造株に一括統合された時点において甘楽社は解散し、養蚕農民に直接現金収入をもたらした工場機能は終息した。

## 戦後の養蚕製糸状況

**終** 戦後、再び生糸の国際市場化に基づき確立したが、甘楽社は既に解散してしまっていたために「復帰」することはなかった。

戦後の当地域の養蚕は完全に養蚕と製糸とに分業化され、農家は養蚕のみの生産者になり、繭価の変動に左右されるようになった。これを救おうと農協の製糸場も生まれたが糸価の暴落はこの工場の存続をも不能とした。

さて、富岡市の工業製品の出荷額は昭和三十六年までは生糸を主体とする繊維製造業が第一位を占めていたが、翌三十七年度からは電気器械製造業にその立場を奪われ、以後、その復活は実現せず、格差は拡大するばかりであった。これは養蚕業の衰退を意味するものであり、やがて到来した生糸の低落により当地域の伝統的

産業である片倉工業(株)富岡工場や農協の製糸工場は操業をやめ、百二十年の歴史の幕を閉じた。

## 今後の展望

**当** 地域の農地を見ると、かつては至る所に広がっていた桑園はほとんど姿を消し、養蚕農家は今や約百戸だけ。糸価の低迷は製糸業はもちろん養蚕業、ひいては桑園面積の激減をもたらししてしまった。糸価の低迷はシルク自体の価値の低落ではなく、東南アジアなどの低廉な生糸の大量な製出によることが多い。これらと同等の生産価格が肯定されなければかつての養蚕・製糸王国たる当地域の養蚕・製糸業の復興は困難と言わざるを得ないと思われる。

しかし、当地域には日本の殖産興業を推し進めた旧官営富岡製糸場の建造物群が、ありし日の姿のまま片倉工業(株)の管理下に残っている。それは前述のように木骨レンガ造りの大規模な洋風建造物であり、その施設設備は当時としては超近代的なものであった。

その具体的一例を挙げて見ると、  
①三百台の器械製糸は当時としては世界最大級であった(欧州でも百五十台が最大)。  
②スクラップ・アンド・ビルドを繰り返したわが国の工業史の中で、これを遥かに超える大きな規模や堅牢さを保っていた。  
③三十六回の煙突・レンガ造りの下水溝や深い穴を穿った避雷針・二段構成のガラス窓はフランス式環境衛生思想に基づいている。

④大規模の繭倉庫は当時年一回の養蚕に対して通年操業を保証する原形を示している。

このように明治初期の洋風建造物の文化遺産としては他に類例がないほど整った形で遺存している。しかし、この事実の解説のみでは養蚕・製糸業の直接の復興を意図するものではないが、わが国の産業発展の歴史的証人であることには間違いないのである。

現在、片倉工業(株)本社の了解を得てJICが主体となつて行っている赤レンガ写生大会(本年度



赤レンガ写生大会

で二十一回)やJICと市の共催のザ・シルクデー(同十七回)、さらには小中学校長OBを主体とした建物の歴史的経緯を解説したりする外観説明会(同七回)も、この事実を検証し、かつ顕彰する目的を持つものである。シルクデーでは、民族衣装パレード、大道芸、ゆかたコンテストなどを実施している。そして、やがて片倉工業(株)が歴史的・文化的施設として全面開放されることを期待している。そこにわがまちの宝が本来に位置付けられると確信するものである。

どう守る、わがまちの宝

#### ④富山県砺波市

富山県西部の庄川扇状地に広がる砺波平野に、全国的にも珍しい農家が散在する集落「散居村」と呼ばれる美しい景観が見られる。点在する農家の数は、約一万戸で散居村の代表例として知られている。この砺波平野の中心に人口

四万一千人の砺波市がある。

#### カイニヨ

### 散

居村の各農家は周囲をカイニヨと呼ばれる屋敷林に囲まれている。その形ができたのは、砺波平野の開拓が進んだ中世末から近世にかけてである。屋敷林には実のなる柿や庭園用の庭木のほか、杉やケヤキなどの大きな樹木も多く、かつては、日々の燃料や家を建て替

えるときの建築材料として使用されてきた。また、各農家は、風雨や吹雪から家を守り、冬の寒さをしのぎ、夏の強い日差しを避けるために屋敷林を大切に守り育ててきた。

昭和三十年代後半から、防風効果に優れたアルミサッシや価格の安い外材など建築材の普及、電気、ガス、石油による生活様式の変化、さらには、道路交通網の整備や住宅団地の造成など、都市化の進展などにより、今日、散居村形態が徐々に失われつつある。

しかし、散居村は、長年にわたって先人の知恵で育てられ、守られてきた貴重な文化遺産であり、生活遺産でもある。また今日、地球規模の環境の悪化が懸念されている中で、人びとが生きていくうえで掛け替えのない自然を大切に次の世代に引き継いでいくためにも、四季の変化に富んだこうした散居村の自然を維持・保全していくことが求められている。

#### まちづくり条例の制定

砺波市は、砺波平野の砂質土壌を活かしたチューリップ球根の大生産地でもある。春の雪解けとともに緑の芽を出し始めたチューリップが、じゅうたんを敷いたように色鮮やかに砺波平野を覆い、毎年、五月のゴールデンウ



# 農家が散在する散居村を守ろう 集落の環境維持が今後の課題



砺波市企画調整室長  
堀秋博

イークを中心に、チューリップフェアが開催され、全国から多くの人びとが訪れる。

平成五年、花と緑に包まれた美しいまちづくりを進め、自然と調和のとれた生活環境を創造するため、「砺波市花と緑のまちづくり条例」が制定された。この中で、「市は市民と一体になり、学術的および景観的に貴重な散村および屋敷林を保全し、緑あふれる快適な生活環境の創造に努めなければならない」とうたわれており、良好な景観の維持などに必要な樹木または樹林を指定したり、事業者および市民団体と花と緑の推進に関する協定を締結するなど、市民と市が一体となって緑あふれる快適な生活環境づくりに努めている。

また、昭和五十八年に散村地域研究所を設置し、地理学、歴史学、そして生物学や植物学などさまざまな角度から学問としても、散居村の調査研究をしている。

**全国連絡協議会の設置**  
 散居村は、豊かな緑、水、そして、それぞれのプライバシーを大切に作る住環境など、人間が生活していくうえで最高の生活環境ではないかと思う。

このことは、本年八月発行の民間ビジネス誌による日本全都市ベストシティランキングにおいて、砺波市は、全国六百九十八都市の中第六位に評価されていることから分かる。なお、上位の五都市は、いずれも東京都特別区である。この散居村の生活・環境をどう維持していく

かが今後の課題であるが、守っていくためにはそれなりのコストがかかる。たとえば、生活道路延長、下水道の管理延長が長くなり、建設コスト、維持管理費が割高となるなど行政経費が増えるという問題がある。

そこで、全国で同様の散居景観を持つ自治体が一堂に集い、平成六年から十二年にかけて、五回の「全国散居村サミット」を開催した。

散居なるがゆえの悩みや課題の解決法や、屋敷林、景観、環境、快適居住空間などの保全活用などについて話し合い、情報を交換するとともに、交流を通じて散居村の可能性を探るなど、共同討議を終え、これからのまちづくりに当たっての共同宣言をそのつど行ってきた。

さらに、サミット参加自治体が、より連携を深めて、散居村における地域諸課題の解決施策について調査研究をするため、本年五月、加盟七自治体（北海道栗沢町、岩手県胆沢町、山形県飯豊町、静岡県大井川町、富山県入善町、富山県砺波市、島根県斐川町）で「全国散居村連

#### 第五回全国散居村サミット共同宣言

- 一 散居・屋敷林の景観と自然特性を守り、自然と人間が調和するまちづくりをめざす。
  - 一 水・緑の空間を再創造し、環境と共生した二十一世紀社会のまちづくりをめざす。
  - 一 人・情報の交流をすすめ、夢と希望を持つ心豊かな人を育むまちづくりをめざす。
- 以上、参加した自治体の交流と連携を深めたまちづくりをめざしていきます。

絡協議会」を設立した。

また、来年度の第六回サミットを、砺波市で開催する予定になっている。今後、より一層の成果が挙がるよう努めたい。

#### 田園空間博物館構想

**砺** 波平野の散居村は、わが国を代表する農村風景の一つであり、富山県と、散居を構成する七市町村で、散居村の保全・整備を通じて、地域の活性化を図るとともに、国民的活用を推進する「となみ野田園空間博物館整備事業」を進めている。

このソフト事業の一つに、屋敷林の過度な枝打ちや伐採を防止し、散居景観を守り育てていくために、枝打ち費用に対する支援やマニュアルの作成がある。

また、ハード整備としては、中核施設（コア）と地域拠点（サテライト）を整備するとともに、ネットワーク化を図り、砺波平野全体を田園空間博物館とするものである。

コアには、散居村ミュージアム（仮称）の建設計画があり、①散居村を体験する②散居村を知る③散居村を保全する④散居村を語る⑤散居村を創る―という観点から施設整備が進められることになっており、伝統家屋の移築展示や資料展示などを予定している。

美しい農村景観を未来の子供たちに伝えるため、ボランティア団体の人たちや地域住民の皆さんと行政が協働で散居村を守り育てていきたいと思う。

どう守る、わがまちの宝  
⑤ 岐阜県真正町



真正町は、岐阜県南西部に位置し、人口約一万二千人、総面積約十二平方キロのまちである。

かつては純農村地帯だったが、岐阜市や大垣市の近郊のため、十数年前から工場や大型集積商業施設が進出し、変貌が著しい。

町内北部の本郷地区には、三百年前から伝わる郷土芸能「真桑人形浄瑠璃」がある。これは、歌舞伎における地芝居のように浄瑠璃に合わせ、歌舞伎における人形芝居で、年に一度、氏神である物部神社の祭礼の際、奉納上演されている。

### 鯖江市で公演へ

**夜** 九時過ぎ。本郷区の北部研修センターから浄瑠璃が漏れ聞こえてくる。「真桑人形浄瑠璃伝承同好会」のメンバーが練習をしている時間である。

見台を前にして指導者と被指導者が向き合っている。高く、低く、あるいは長く、短く、息を整

えて、語調正しく浄瑠璃本を読む。指導者の声に合わせて、後に続きながら繰り返し練習を行う。隣の部屋では、婦人部の女性が、一体の人形に三人（主遣い、左手遣い、足遣い）がついて、人形としての全体と部分の動きを鏡を見ながら練習に余念がない。

真桑人形浄瑠璃伝承同好会の会員は、地元の本郷地区に居住する人はもとより、真正町内だけでなく近隣の市町村に居住している人もい。また、「同好会会員募集」のチラシを見たり公演を見て、会員になった人もい。真桑人形浄瑠璃伝承同好会員と婦人部員は、今年十月には福井県鯖江市の依頼を受け立待公民館で「伽羅先代萩 正岡忠義の段」など二外題の公演を行う予定である。

### 若い世代の育成

**一** 月下旬の祭りが近い土曜日の午後。物部神社の奉納上演に向けて、本郷地区の小中学生全員を対象に浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」の練習が始まる。熱意ある指導者の浄瑠璃語りを口移しで習う。小学生のときから真桑人形浄瑠璃に興味と関心を持たせると共に、将来の後継者づくりの一環をなすもので、地区の保護者の理解があって成立するものである。

祭りの日、出演を終えた子供たちには成功感にあふれた笑顔や満足感が見られる。

町立の真正中学校には、「真桑人形浄瑠璃同好会」がある。平成元年に発足した。最初はクラブ組織であったが、現在では部活動の一つとして全校生徒を対象に部員を募集し、活動を行っている。部員数約三十人。本郷区の生徒もいるが、町内の他地区の生徒もいる。

部員は運動系部活にも所属することができ、部活が終わって週一回、午後七時からの練習に夕食もそこそこに駆けつける。汗にまみれたユニフォーム姿のままのときがしばしば見られる。短い練習時間を効率的に各パートに分かれて行う。

発足当初は、人形遣いのみだったが、数年前から浄瑠璃、三味線を含め、「傾城阿波の鳴門」の全部を演ずることができるようになり、その演技レベルも高い水準に達している。「中学生は覚えが早く、教えやすい、教えがいがある」とは、指導者の言である。

真剣に人形浄瑠璃の練習・稽古に立ち向かい、自ら進んで伝統芸能を身につける努力を続ける一方、真正町と同じく浄瑠璃伝承に力を入れている兵庫県・南淡中学校との交流を進めな

# 郷土芸能・真桑人形浄瑠璃を伝承 小学生から練習、中学校には同好会



真正町文化ホール館長  
廣瀬卓夫

がら、技能の向上に努めている。

指導者の助言を素直に聞ける生徒たち。「教えていただいたこと、学んだことが公演で実現できてうれしい」とは中学生の弁である。

三年に一度は全校生徒を対象に部活動の生徒が出演する「傾城阿波の鳴門」を鑑賞させる機会を設けているほか、時には各地からの要請に応じて公演を行い、高い評価を受けている部活動だが、こうした生徒たちも、部活動を引退してからには、全く真桑人形浄瑠璃とかわらなくなってしまうのが通例である。

「惜しいなあ。これから続ければもっと伸びるのに」と、指導者を嘆かせていたが、中学校卒業後も引き続いて五人の男女高校生が三味線の練習を積み重ねる姿が見られるようになった。そのばちさばきは、大人の熟練者と同等の芸域まで達した生徒もいる。「今後も続けていきたい」との言葉に指導関係者は喜んでい

る。外題のレパートリーも広がり、大人とともに物部神社の祭礼時に出演した。浄瑠璃や人形操りも継続する高校生の輩出を期待している。

## 青年部の活動

# 昭

和五十五年に結成された青年部員は現在五十九人。本郷地区の青年全員が加入し、

川西、川東、三ツ屋・西境の三区に分かれ、それぞれが独自の外題を持って伝承活動に励んでいる。とくに、活動の担い手となる青年部（十八歳～四十二歳）の結成は、後継者育成の重要なポイントであったといえる。

昼間の勤務を終えて、夜の練習に駆けつけ疲れた体にむち打って、高度な練習に励む姿はまさに真桑人形浄瑠璃を伝承しているこうとする青年部の情熱にはかならない。

昨年からは青年部が総力をあげて、「真桑養義農源七郎（まぐわのほまれぎのうげんひちろう）」という新外題に取り組んでいる。

主人公の福田源七郎は江戸時代真桑用水内における灌漑用水の配分量についての村々の争



祭礼での子供会の発表

い・紛争を見事に解決に導いた。功績をたたえて、農民が感謝の意を表して「義農源七郎」という外題で真桑人形浄瑠璃を演じたことに始まる。しかし、いつごろのことか明確ではないが上演されなくなり、台本はもとより、それに関する資料は現在何も残っていない。その意味で、真桑人形浄瑠璃の創始となった外題「義農源七郎」を復活上演することは長年の夢であった。

人形操りに専従する十九人を選抜して取り組むことになり、真正町文化ホール名誉館長・吉田玉男氏（人間国宝）の監修、文楽協会に指導をお願いし、浄瑠璃作者川村正、振り付け藤間琴扇、浄瑠璃に白木勝、三味線に吉村二郎があたりになった。

郷土の偉人をたたえる待望の新作である。

今年の十一月に真正町文化ホールで公演を行う運びとなっている。町民がこぞってこの新作の誕生を祝い、これから長く後世に受け継がれていくよう願っている。

## 二つの課題

# わ

が町が誇りとする真桑人形浄瑠璃は、現在、人的課題（後継者育成）と財政的課

題（人形・衣装・道具などの補修および維持管理）の大きな二つの課題に直面している。この解決には、町の財政的な支援はもろんのこと、官民一体となった支援体制の強化が望まれる。真正町の宝、真桑人形浄瑠璃が未来永劫、継承されていくことを願うとともに町の未来を担う子供たちにこの願いを託していきたい。

どう守る、わがまちの宝

近畿地方のほぼ中央にあり、奈良県の北端に位置する奈良市は、七一〇年に「平城京」として都が開かれ、千三百年近くの間、歴史と伝統、美しい自然と世界に誇る数多くの歴史的文化遺産を守り、県都として着実な発展をとげてきた。

平成十年には市政百周年を迎えるとともに、「古都奈良の文化財」として東大寺をはじめとする八資産群がユネスコの世界遺産リストに登録され、さらに本年四月には、中核市に指定され、人口三十六万七千人を擁する国際文化観光都市としてさらなる発展を目指している。

## JR奈良駅周辺整備と駅舎

**昭** 和六十三年に旧国鉄の電車基地跡など約五ヶ所を含む二三・六の地区を対象として、土地区画整理事業、再開発事業などによる基盤整備とともに、民間活力を積極的に導入する総合整備計画「シルクロードタウン21」が策定され、これに基づき、奈良の玄関口にふさわしい新たな都市拠点形成に向けての取り組みがスタートした。

この時点では、JR奈良駅を橋上化し、「奈良駅舎」については駅機能の一部として活用することとなっていた。

その後、駅周辺土地区画整理事業や再開発事業が進められる中、懸案事項として継続的に検討がなされていた鉄道の高架化についても、市民の一層の要望が強まり、県および国に対しての要望活動が行われ、平成四年（五年）に連続立体交差事業の国庫補助調査、七年には事業採択される運びとなった。

連続立体交差事業により、駅部を高架化するには、現在の営業線を仮線に切り替えての運行が必要となり、「奈良駅舎」が仮線敷設に支障となり、また、駅機能が高架駅に移ることから「奈良駅舎」の保存か撤去かの論争へと発展した。

## 三条のすてんしゅん

**初** 代奈良駅は明治二十三年に誕生し、木造平屋建ての日本瓦葺きで、三条通りに面していたため、「三条のすてんしゅん」という愛称で親しまれ名所となっていた。

現在の「奈良駅舎」は二代目で、昭和九年に旧国鉄の技術陣による設計で建てられ、一説によれば、京都帝室美術館の設計コンペ案を修正して設計されたというエピソードもある（昭和

五年に行われた「大礼記念京都美術館」のコンペだと思われる）。

当初の計画では、二期に分割して行われる予定で一期工事が中央部および左翼部の一スパン、引き続き二期工事が行われることになっていた。しかし、日中戦争の勃発などにより延期され、その後（昭和三十二年）計画を縮小し右翼部の増築が行われ現在に至っており「未完の駅舎」とも言われている。

## 仏寺のまちを象徴

**建** 物はSRC造り、二階建て、延べ床面積一二五・七八平方メートルの規模を有し、その意匠・形態をみれば日本古建築様式を随所に取り入れた和洋折衷のデザインで、当時の流行だった帝冠様式が基本的に採用されている。

木造小屋組の方形屋根、その四隅に吊り下げた風鐸（青銅製の鈴）、屋根の頂点にかかげられた相輪、軒裏垂木、柱頭部の肘木などの古建築様式と両翼部に見られる壁面のタイル貼りやスチールサッシなどの西欧風、近代建築を感じさせる部分も多く独自のデザインとなっている。

また、内部においても折上格天井や柱頭部には相宝華や四弁花、忍冬唐草の飾りなどの古代文様が随所に用いられ「仏寺のまち奈良」を象

# JR奈良駅舎、県、市、JRが保存決定 周辺のまちづくりと併せた利活用検討



奈良市都市計画課係長  
南 善嗣

徴する建物である。

## 行政と市民運動

# 平

成十年に連続立体交差事業の仮線敷設に支障が出、駅機能がなくなる「奈良駅舎」の扱いについて、有識者で構成する「連立事業景観・デザイン検討委員会」が奈良県庁に設置され、高架構造物や駅部のデザイン、周辺への景観の配慮などと併せて検討が行われた。

「奈良駅舎」のもつ歴史、建築物としての評価、文化財的価値、市民や観光客の思い出や思い入れ、愛着などが論じられ、移築・移設しての全面保存をはじめ、新高架駅への部分保存、部材や仕上げ材を活用した再築、建物様式やデザインを再現する案も検討される中で、市民をはじめ県民の意識を問うため、県内の各界、各層へのヒアリング調査が行われた。

これらの調査や議論を踏まえ、検討委員会より「奈良駅舎」の扱いについて次のように提言された。

「文化財的な位置づけ、古都としての周辺景観との調和、駅前広場の機能性、管理・運営などのさまざまな観点から総合的に検討を行ってきた。その結果、当委員会の大勢としては全面保存でなく、新しくつくる駅のデザインに適切な配慮を行うことが妥当である」

一方、検討委員会での議論の中間報告や最終のまとめである提言がなされるに合わせて、市や県、JR西日本に対し保存を要望する団体から署名をはじめ、保存計画の提案などの要望書

が提出され、保存に対する市民の声の一つとして届けられた。

こうした状況下において、JR奈良駅の周辺整備を進める市にとって、この「奈良駅舎」の扱いは、駅前広場の整備や周辺のまちづくりに影響を与えることから、重要課題として取り組む必要があった。

しかしながら、バブル経済真っ直中で計画された駅周辺市街地整備事業が社会情勢の大きな変化や長引く経済不況などにより、民活による大型プロジェクトの導入を断念するなど、計画変更を余儀なくされる中で「奈良駅舎」の扱いについての判断は、公費投入の是非が問われることと、「奈良駅舎」がもつ歴史的、シンボリック価値や、市民並びに観光客の愛着などを考えると、市にとっては苦渋の選択を迫られることとなった。

連立事業着手のタイムリミットとなった十三



年に県、市、JR西日本により、検討委員会の提言を踏まえての協議が進められた。

同年九月に奈良県知事、奈良市長、JR西日本社長のトップ会談が行われ、連立事業により三者で「奈良駅舎」を保存することが決定されるに至った。

その利活用については地元である奈良市が利活用することで三者合意がなされ、三年間に及ぶ「奈良駅舎」の保存か撤去かの議論に終止符が打たれた。

## 今後の展望

**現** 駅舎の保存は、駅周辺のまちづくりと併せた利活用が求められることになり、現在利活用についての検討の最中である。

やはり、市にとって一番の課題となるのが、管理・運営であり、厳しい財政状況であることから、市民の理解を得られる利活用に対する公費投入でなければならない。

保存の意義を最大限活かしての新しいまちづくりを担うこととなる「奈良駅舎」ではあるが、保存を強調するのではなく、あくまでも自然体であると同時に市民や県民、そして奈良を訪れる観光客が親しみと愛着をもって利活用される施設となるよう、望まれているところである。

注① 天井の中央部を高くするため、回り縁から天井まで丸形をなして立ち上げた格（二・二・五寸の角材を組み合わせた）天井

注② 華麗な花の意で想像上の植物。奈良・平安時代に用いられた装飾文様の一つ

注③ 唐草文様の一つ。飛鳥唐草ともいう

どう守る、わがまちの宝  
① 山口県長門市

浜は祭りの やうだけど

海のなかでは 何萬の

鯨のとむらひ するだろう

これは長門市が生んだ童話詩人、金子みすゞさんの詩「大漁」の一節である。

長門市は、山口県の北西部に位置する人口二万四千余人余の市で、この詩に詠まれているように、産業は水産と観光を中心としている。とりわけ水産業は江戸時代全国各地で捕鯨業が始まると、この地方でも各浦に集団で捕る鯨組が組織され、長州藩の指導と保護のもと三つの鯨組に集約され、明治末期まで網捕り式捕鯨が行われた。

この網捕り式は三百年近くの長い期間、長門に多大な富をもたらすとともに、多くの民俗文化と芸能を残した。

### 全国唯一の鯨墓

鯨墓・鯨位牌・鯨鯢過去帳は、鯨の生命を奪う人間としての心の痛みから、鯨の菩提を弔い供養することで鯨の往生安楽を願うもので、元禄五年（一六九二年）につくられた。



くじらまつり

これらは国の史跡・県の民俗文化財に指定されている。とりわけ鯨墓は鯨の胎児だけを埋葬する墓としては全国で唯一、存在する。

他に鯨組の網元の早川家住宅は全国的にもまれな漁家の遺構として、国の重要文化財建造物に指定されており、民俗芸能である鯨唄は市の指定文化財になっている。このように市内には多くの文化遺産が残されている。

### 感謝と弔い

鯨の墓は鯨組網頭・池永家出身の向岸寺五世讃誉上人が、住職を辞して後進に譲った延宝七年（一六七九年）に、念仏三昧の日々を送るため庵を建て浦人たちに殺生を戒め、殺生した者に対しては報恩感謝の念をもって回向をするよう説いた。説教を始めて十三年後、ようやく網頭たちの手によって鯨の墓が建立され、それと同時に位牌・過去帳もつくられ、鯨の回向が始まったのである。

このお墓の前には、業尽有情雖放不生  
南無阿弥陀仏  
故宿人天同証仏果  
と刻まれている。

この意味は運の尽きてしまった子鯨たちよ、われわれは本来お前たち胎児まで捕らえるつもりはなかった。むしろ海の中に放してやりたいがもはや生きてはいけないであろう。だからお前たちの供養を続けるので悟りをもってどうか成仏してほしい、という浦人たちの願いが込められている。この願いは命あるものへの思いやりと、心のやさしさと感謝の気持ちの表れである。

# 捕鯨の伝統、文化守るサミット開催 まちおこし目指し、「くじらまつり」を



長門市くじら資料館館長  
白石政人

## 網捕り式を再現

平 成四年、鯨墓が建立されてからちょうど三百年目にあたることから、通漁協青年部の若者を中心に「鯨墓建立三百年祭」を企画した。まちおこしを目指したもので実行委員会を設立し、再三議論を重ねるなかで、江戸中期にこの地で行われていた網捕り式捕鯨の再現をメインとした「くじらまつり」を実施することに決定した。若者たちは「くじら船」の製作に取り掛かったが試行錯誤の連続で、大変な苦勞をし、第一回目の「くじらまつり」を盛大に開催することができた。彼らにとっては大きな自信と誇りになったと思う。

この「くじらまつり」も今年で十一回を数え、さる七月二十日に盛大に開かれた。十年前の若者たちも年齢を重ねた。古式捕鯨の行われていた地域に密着したまつりとして定着し、継続させるには長門市全域での協力体制の確立と、古式捕鯨を再現して見せる後継者問題を真剣に討議すべきときになってきていると思われる。また、通地区には当時の鯨組や捕鯨の歴史を展示した「くじら資料館」があり、常時、七十点を入れ替えている。市内のマンホールのふたの一部には鯨の図柄が使用されている。

## きつかけつったIWC下関会議

くじら した中、今年の五月に下関市で国際捕鯨委員会（IWC）年次会合が開催されることが決定すると、長門市は捕鯨に関しては江戸時代の網捕り式捕鯨に始まり、近代捕鯨発

祥の地としての歴史をもつことから、何らかの形でIWCとかかわりを持ってないだろうか」と、市長が水産庁、下関市、財鯨類研究所をはじめ、各団体と折衝を重ねた。その結果、わが市で第一回日本伝統捕鯨地域サミットを開催することができた。伝統捕鯨の歴史を持つ全国の自治体のご理解と寛容の精神の賜と深く感謝をしている。

この地域サミット後にIWCの方々を長門市に招き、通地区での鯨に対する慈しみの心と、鯨に対するやさしい心根に触れていただければと、鯨回向に参加していただいた。捕鯨に理解を示す国の委員の方々は、鯨の霊前に額ずき日本人と同じように焼香をしてくれたことは大いに感激させられた。その後のデイスカッションの場でも、鯨法要という日本の宗教行事に感銘を受け、自国に帰ってから多くの人たちに命の大切さを伝えたいとの発言を聞き、伝統捕鯨地域サミットと、長門カルチュラル・エクスポージャー（文化へのいざない）の目的の大半を達成することができたものと確信した。

しかし、捕鯨に理解を示す国の委員とは対照的に、イギリスBBCラジオのリポーターにこの地域の人たちが示した鯨に対する思いやり、感謝の気持ちについて話すと、「それほど感謝をしている鯨をなぜ殺して食べるのか」との返事がかえってきた。

日本では古くから山野の獣の肉を食べることを忌み嫌う習慣があり、海からの恵みである鯨

を神からの贈り物として、貴重なタンパク源として利用していた鯨食文化がある。自分たちの生活のためとはいえ、尊い命を奪った鯨に感謝をし、彼らの往生安楽を願って三百年以上も長い間、供養を続けていることを話しても理解を示そうとはしない。

人間あらゆる生物の命を奪うことで、自分たちの生命を維持していることを考えるとき、原稿の冒頭に引用させていただいた、「金子みすゞ」さんの詩の一節にあるように命を奪われた鯨たちが海の中で静かに執り行う悲しみの弔いに気づき、人として受ける恵みや日々の行為に感謝の心を忘れることなく、思いやりと、やさしさを持ち続けることで、世界の平和にもつながることを願ってやまない。



伝統行事「鯨回向」で鯨の過去帳を見るIWC関係者



徳島県民環境部長  
飯泉嘉門

# 過ぎ去りし 夏の風物詩

## デイスカバ 徳島の宝物

### 1 ●「とくしま」名物

「徳島」から連想するベスト4と言えど、多くの方は「阿波踊り」「うず潮」「スタチ」「わかめ」では？ 「藍染め」「四国八十八カ所の一番札所」「和三盆」を挙げる方は、なかなかの「とくしま通」と言っても過言ではない！

### 2 ●「阿波踊り」

これらのうち夏といえば、迷うことなく「阿波踊り」であろう。鳴門市に始まり、徳島市を経て池田町で閉じる。徳島市は曜日に関係なく八月十二〜十五日までの四日間。今年は県全体で約百六十万人の入込みがあった。来年は統一地方選も予定されており、選挙啓発の絶好の

機会として職務柄、「明推連（明るい選挙推進「連」の略）」として、「ぞめき」のリズムに合わせ三カ所で踊り抜いた。なお、この時期はお盆と重なり、宿も交通機関も大変混雑する等、特にアメニティの面から県外の方に敬遠される傾向があるが、逆に小料理屋などでは、「忙中閑有り」の典型ではないが、その実は閑散期であり、予約しておくと思わぬサービスを受けられる可能性も！

### 3 ●高校野球史上「初の快挙」

先般の「あつい、あつい」夏の高校野球甲子園大会、四国代表四校がすべてベスト8に進出するという大会史上初の快挙！ 組み合わせ抽選の妙も加わり、準々決勝は四国勢同士の対戦はなく、各校の選手たちも最初に負けて帰ったくないとコメントするなど、ひょっとして準決勝は「四国大会？」との期待も高まった。実は、春の選抜大会でも四国勢は出場した三校すべてがベスト8入りするという今回の予兆はあったのだが：（残念ながら、本当に残念ながら最初に甲子園を去ったのは、選抜準優勝の本県代表「鳴門工」！）。

### 4 ●「鰻」と祇園祭

全国でも有数の夏の風物詩といえば、京都の祇園祭。そして、これと切っても切り離せない

のが鰻料理。しかし、その多くが徳島産であることは、意外と知られていない。この時期、徳島の小料理屋では水槽で悠然と泳ぐ鰻にお目にかかるのは珍しいことではなく、「とくしま」ならではの食仕方もあり、ぜひ、お試しいただきたい。もともと、老婆心ながら、お値段の関係からは祇園月間が過ぎた八月に入ってからの方がお勧め！

### 5 ●「スタチ」

昨年の秋、秋刀魚に「スタチ」と「カボス」のいずれを掛けるか、主人公が迷っていると、夏目漱石の「我が輩は猫である」よろしく、猫が「どっちでもいいのに」と発するビールの宣伝をご記憶の方も多いだろう。このスタチ、魚料理（刺身、焼き魚を問わず）、素麺のつゆ、おすまし、焼酎はもとより、夏の口がまずい食欲減退期、料理や飲物に添えると最高。なお、その清涼感たっぷりの風味をより引き出した方は、皮の部分を下ろして用いるのが秘訣！

### 6 ●むすび

読者の皆さんに、一層の「とくしま通」となっていたくため、夏にちなんだ幾つかの事象を紹介させていただいたが、これらをヒントに、ぜひとも、あなただけの「徳島の宝物」、発見していただきたい！

どう守る  
わがまちの宝



### トンボ王国＝佐賀市

佐賀市内に広がる総延長2千<sup>※</sup>といわれる水路網には、  
魚が群れ、トンボが飛び交っている。  
この優れた環境を守り育てるため、  
公共工事は専門家の意見をうかがって自然環境に配慮し、  
トンボ池や湿原を整備した。  
トンボ教室からは毎年豆博士が誕生し、  
トンボの写真コンクールやカレンダー・名刺の作製も行って  
「トンボ王国・さが」づくりを進めている。

## 知床100平方メートル運動Ⅱ北海道斜里町

開発の危機にあった国立公園内の離農跡地を、全国から募った寄付金で買い上げて森に戻そうという「しれとこ100平方メートル運動」が始まってから二十五年。土地の買い取りはほぼ終了し、現在はその間に原生の森を復元する新たな運動「100平方メートル運動の森・トラスト」を展開している。



## 八幡堀Ⅱ滋賀県近江八幡市

豊臣秀次が八幡山城築城の際、物流のための運河として整備した八幡堀は、まちの経済を活性化させ多くの近江商人を輩出したが、昭和四十年代にはヘドロの堆積により公害源と化していた。埋め立て案が浮上したが「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」をスローガンとする市民運動の末、しゅんせつ、清掃活動など行政、市民協働による堀を守る活動が続いている。



## 出雲弁スピーチコンテストⅡ島根県宍道町

ズーゾー弁で知られる出雲弁は、独特の語いとおんぼら（ほのぼの）としたイントネーションをもつ現代のいやし系の言葉である。宍道町東古館で開催される「出雲弁・ロススピーチコンテスト」も三回目を数え、いつものとおり会場を爆笑の渦に巻き込んだ。出雲弁を保存し、地域文化のうねりにしていこうと結成された「宍道・出雲弁保存会」の活動も盛ん。



世界最高品質の水 岩手県岩泉町

龍泉洞は、日本三大鍾乳洞の一つで、洞内の地底湖は世界でも有数の透明度を誇る。「龍泉洞の水」は、自然の味をそのままにボトルリング。カルシウムを多く含み、またミネラルもバランス良く含んでいる。国際食品オリンピックの「モンドセレクトシオン」で「世界最高品質賞」を受賞した。世界的にも認められたおいしいミネラルウォーターだ。



鹿島参宮鉄道は、大正十一年に  
開業して以来八十年間、  
地元の大切な交通機関として  
地域社会に貢献してきた。  
近年、利用者の減少などで赤字経営が続き、  
存続が危ぶまれており、  
沿線自治体では、住民の貴重な交通手段として、  
なんとかこの鉄道を残そうと  
沿線住民の方々の意見を聞きながら協議を重ねている。  
その一環として「まちづくり市民号」を運行した。

鹿島参宮鉄道の存続 茨城県石岡市

水仙棚田オーナー制度＝福井県越前町  
梨子ヶ平集落には日本の棚田百選に選ばれた「千枚田」と呼ばれる三・五畝の水仙園があり、平成十三年  
度から越前水仙のオーナー制度を始めた。年会費五  
千円（百本保証）、年三回の統一作業日を設け、草刈  
り、収穫作業、農業体験や交流会を実施している。  
そのほかオーナーにならなくても水仙の「切花体験」、  
梅の「もぎとり体験」「生産直売」なども実施している。



地元のまちづくりを考えるグループ「赤岡まちの宝物ホ  
メ残し隊」は、平成二年まで営業していた大正期の建物  
と思われる木造の小さな元銭湯「旭湯」を借り受けて、  
銭湯ならではの番台や湯船を利用できる出し物を選んで、  
「旭湯お気楽演芸場」を開き、子供たちも一緒に楽し  
める催しなどを行っている。そして旭湯購入資金を集  
めるため、「犬も歩けば赤岡町」という本を発行した。  
本を売って銭湯残そう＝高知県赤岡町



column

# 変容する



坂本久美  
奈良新聞編集局長

# 奈良観光

紀伊半島の中央部にどっかりと腰を据えたように奈良県がある。といつても、面積は国土の1%に過ぎない。指をそろえた手の平に似た形で、その西北部に小さな奈良盆地（南北三十<sup>キ</sup>、東西十六<sup>キ</sup>）があり、ここにほとんどの市が集中、小面積の自治体がモザイクのようにひしめく。

大和言葉で「くんなか（国中）」と呼ばれる、

この地域が、言うまでもなくわが国建国の「まほろば」である。盆地をぐるり取り囲むのが大和青垣の山々。とくに東部山間と吉野の山々は驚くほど深い。その自然は豊かな水源をはぐくむ。この山々こそ、国中に住む者の背後にあつて物心両面の支えとなつてきた。

奈良が昔から観光県であることは論を待たな

い。遠くの人でも、たいていは「修学旅行で一度行つた」と答える。しかし、その修学旅行が多様化し、各地に分散するようになってから観光全体の減少に歯止めが掛からなくなった。古く抹香臭いだけの奈良という印象が強いらしく、いつの間にか若者には魅力のない土地柄になつてしまつたのだ。

そうした観光の長期低落傾向が、最近になつて少し様変わりしてきたように思う。

いち早く世界遺産に登録された法隆寺と、それに続いた「古都奈良の文化財」（東大寺、興福寺、元興寺、春日大社、薬師寺、唐招提寺の六社寺と平城宮跡、春日山原始林）が、昔も今も奈良観光の中軸であることに変わりはない。NHKがドラマ「聖徳太子」を放映したことも手伝つてか、各寺の出張展が相次ぎ好評を得、今年、大仏開眼千二百五十年を記念した「東大寺のすべて」展の来館者は四十万人を超えた。皆さんで不透明な世相の中で、仏教文化への回帰願望がありはしないか。

加えて最近、ブームになっているのが「奈良町散策」である。奈良町とは、江戸時代から庶民信仰の中心だった元興寺門前に形成された、

独特の風情を持つ町並みである。そぞろ歩いているだけで、懐かしい気分になせられる清潔な道筋。洗練された美意識をさりげなく感じさせる町家のたたずまい。そこにただよう温かい人情。長い年月を経て醸成され、にじみでてくる魅力。この地区ならではの、個性的な生きた文化財と言えよう。

観光とは、易经にいう「ソノ国土ノ光華ヲ觀ル」ことだという。土地の風土、歴史、生活、人情風俗のなかにある光（価値）を觀、心の華を費ふことをさしている。であれば、歴史や生産に即した生活があるところなら、それがそのまま観光資源なのである。

一方には、ちょうど三十年前に発見され、以後の考古学ブームの光源となった高松塚古墳をはじめ、歴史を書きかえる数々の埋蔵文化財の

出土で多くの国民の夢とロマンをかきたててきた明日香の地がある。昨年のキトラ古墳の壁画調査でも、石舞台に匹敵するという條ウル神古墳（御所市）の発見でも、現地説明会にはたくさんの方が訪れ、受け入れ側を驚かせた。日本のルーツを垣間見せる遺跡、遺物に対する人びとの関心の高さは、地元住民が想像する以上のものがあるようだ。

さらに今、山岳信仰と神さびた自然が魅力の「大峯奥駈道」と「熊野古道」を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が、二年後の世界遺産登録を目指している。高度経済成長を支えた団塊の世代も、今やリストラの対象と目され、疲弊の極みにある。疲れた心の癒やしとなる時空間は、これから最も価値ある観光資源になるのかもしれない。

どう守る、わがまちの宝

⑧香川県宇多津町

宇多津町は瀬戸内海に面した香川県のほぼ中央にあり、東は坂出市、西は丸亀市にはさまれた人口約一万六千人、総面積八・〇七平方キロの町である。また、温暖で雨が少なく、日照時間が長いという瀬戸内海式気候を利用して、「塩づくり」が行われ、かつてはわが国最大の「塩の町」として、その名を全国にとどろかせた。

二百六十年前の開拓

**宇**多津町で初めて塩田の開拓が行われたのは、延享二年（一七四五）の古浜塩田で面積は約九<sup>ヘクタール</sup>。その後、明治時代に約百五十<sup>ヘクタール</sup>の入浜式塩田がつくられ、讃岐では坂出に次いで塩業の中心地となり、それに伴い関連事業である桶屋・浜大工・<sup>はしけ</sup>船などが栄えた。

しかし、戦後の昭和二十九年から三十二年にかけて、多くの人手と労力を必要とし、天候に左右されやすい入浜式塩田から、少ない人員ですむ枝条架を伴う流下式塩田に代わり多数の従業員が離職し、徐々に合理化の波が押し寄せていった。

そして、貿易の自由化が促進され外国産の塩

に比べて割高な国内塩は生産過剰となった。昭和四十六年にはイオン膜製塩方式による塩業整備の法律が公布され、翌四十七年には塩田が廃止になり産業としての終えんを迎え、残ったのは総面積百八十六<sup>ヘクタール</sup>の日本一の規模を持つ塩田跡地だけだった。

一方、製塩廃止より一步先に本四連絡架橋建設計画が進んでいたことから、塩田跡地を四国に新しい活気が生まれる世紀のプロジェクトの受け皿にしようと着目。児島・坂出ルートを受け入れと跡地の再開発で中讃都市圏の中核市街地となるよう、宇多津塩田土地区画整理事業都市計画を策定し、事業認可を受け、地域振興整備公団に計画調整と一部事業を委託して土地整備を行った。

新しい景観

**現**在、区画整理された土地には新しいJ R宇多津駅をはじめ、誘致された観光施設や商業施設などが建ち並び、塩田跡地とは思えない新しい景観の街並みが形成され、昔に寺の町として栄えた一社九カ寺の残る古い街並みの新旧が融合した全国にも珍しい町となっている。

また、塩の町として栄えた歴史を後世に伝え

残すため、町制施行九十周年事業の一環として、宇多津町産業資料館と入浜式塩田を昭和六十三年十一月に新宇多津都市内に建設した。

産業資料館では「見よう、ふれよう！塩づくりと昔のくらし」をテーマに、一階には塩田の砂をならす馬<sup>ま</sup>銚<sup>ち</sup>、海水をすくうときに使った長さ二<sup>メートル</sup>の浜かい杓、海水を運ぶ担桶など、当時使用した作業道具約五十点を展示している。写真パネルも設置した。スクリーン三面を組み合わせたマルチビジョンで塩づくり作業を紹介、当時の暮らしを知ることができる。

# 塩田復元で後世に歴史を残す

## 「自分の塩」をつくる作業所も計画



宇多津町建設経済課主査  
下山雅彦



昔の枝条架式流下塩田



塩田跡地に広がる市街



臨海公園の産業資料館と復元された釜屋、塩田

産業資料館に隣接する復元塩田では、塩田で働いていた人たちにより、復元塩田内の砂に海水を撒き、天日により乾燥・塩の附着をさせ、その後、砂を集めて海水でこして濃い海水（かん水）をつくり、それを釜に入れて焚き、水分を蒸発させ塩をつくる（そのときに、まだ水分は残っており、その水分が集まって「にがり」となる）、といった当時の作業工程を当時使用した道具で塩づくりが行われており、そこでつくられた塩は入場者に記念品として渡されている。

そして、その人たちの指導で希望する入場者には実際に道具を使って復元塩田内で砂を撒き、専用の道具（馬鍬）で均等に縦や横に引き、海水を撒くなどの作業体験ができるようになる。

ている。ただし、事前の予約が必要で、家族単位での申し込みをお願いしている。だが、体験できるのはそこまでの作業で、実際に塩ができるところを見ることはできない。

## 見直し迫られる作業体験

### 年

間約一万四千人あった入場者数も、ここ二、三年は五千人を切るようになり、今、行われている作業体験では入場者の増加は見込めず、見直しが必要となってきた。それと、作業してくれている人たちは高齢になっていて、若い塩田作業体験者はいなく、町職員での後継者育成が課題として残っている。

開館した当時より、釜屋（塩を焚く釜がある）、上屋（作業道具収納・地下にかん水貯水）ともかやぶきで昔の雰囲気をかもしだしているが、

火災に弱く周辺に火気厳禁の看板を設置しているが心配である。

## 塩の販売

### 専

売法が改正され、入場者に記念品として渡していた塩を売ることができるようになったことから産業資料館で販売することにした。つくっている

ことは知っていても販売していることは知られておらず、入場者がお土産として買っていただくだった。宇多津の塩は自然海塩のためミネラルなどが豊富で、味もマイルドで添加物もなく、今の健康食ブームに合うと思われるので試験的に綾歌郡内・坂出の生活研究グループの人たちにお願ひして、漬物や味噌に使用してもらい、知名度アップに努めている。また、地元の商社会社にカタログ販売をしてもらったりしながら販路の拡大を図っている。

そのほか、県内で行われている物産展で、米の試食として配布していたオムスビに「宇多津の塩」を使ってもらって宣伝に努めたり、塩と一緒に「にがり」も販売しているが、「にがり」のほうが好評ですぐに完売する。ただ、「にがり」は製塩の過程でできる副産物であり、量の確保と保存が困難なために資料館でつくられた「にがり」の大部分は近くにある豆腐屋さんで使われ、おいしい豆腐として販売されている。

今後、入場者数を増やし多くの人に知ってもらうためにも、今、行っている作業体験を見直し、土器とかん水を使い、自分の手で塩をつくり、記念として持ち帰りができるような作業所をつくり、今以上の施設利用を考えていきたい。

それと、消費者にアピールできるように塩の袋のデザインや形を変え、町内の観光施設や宿泊施設での販売を目指したい。それにより、昔、宇多津町で塩づくりが行われていて、隆盛を誇ったことを後世に残していきたい。

どう守る、わがまちの宝  
⑨ 沖縄県国頭村

## 森と水とやすらぎの里

**国** 頭村は、沖縄本島の最北端に位置し、西側は東シナ海、東側は太平洋に面し、村

の中央部を本島最高峰の与那覇岳をはじめ原生林の山々が縦走している。村の総面積（一九四・八平方キロ）の約九割が森林、原野で、わずかの平地に二十集落が点在し、人口五千八百人の自然豊かな山紫水明の村である。とくに、豊かな自然を残している国頭三村（国頭村、大宜味村、東村）を、一般的に「やんばる（山原）」と呼んでいる。

この豊かな自然環境は、「ヤンバルクイナ」「ノグチゲラ」「ヤンバルテナガコガネ」など多くの貴重な動植物の生息地でもあるとともに、沖縄本島の水源地として重要な役割を担っている。

## 狭まった生息地

**昭** 和五十六年十一月に、飛べない鳥「ヤンバルクイナ」が新種として発見されたが、

やんばる地域では、昔からこの鳥の存在を知っていた。ヤンバルクイナは地上を素早く走り回



やんばる風景

り、夜間には樹上で休息し、甲高い声で「キヨ、キヨ、キヨ」と鳴く習性をもっている。

昭和六十年代に環境庁（現環境省、平成八から十年度には山階鳥類研究所、十二年度は沖縄県、山階鳥類研究所がヤンバルクイナの生息状況をそれぞれ調査したが、調査を重ねるごとに生息域が北上し、十二年度の調査では、これまでに「ヤンバルクイナ」の分布域であった大宜味村での生息が確認されておらず、生息域が狭まっていることが分かった。

ヤンバルクイナの減少の要因として、ハブ駆除の目的で海外から移入されたマングースが、都市地区の開発が進むことにより本島を北上し、ヤンバルクイナを捕食していることが考えられる。

沖縄県では、やんばるの希少生物保護のため、四月から実施しているマングース駆除事業で、隣村との境界付近で五十匹が捕獲されたが、村内への侵入が懸念される。

マングースが捕獲されている地域では、ヤンバルクイナの生息状況調査結果から、ヤンバルクイナがほとんど生息していない状況である。

さらに、村外から山林に捨てられたネコが野生化し、ヤンバルクイナが被害に遭っていることが明らかになった。

全国的にペットブームの中で、飼主のモラルの向上が求められる。

また、やんばるの貴重な動植物が、一部の心ない人間によって持ち去られている。今後、規制の制定など対策を検討する必要がある。

## 林道工事は小動物に配慮

**ヤ** ンバルクイナなどの希少動物を、野生化した捨てネコから守るため、村としても

看板を設置するなど協力の呼び掛けを行っている



国頭村企画財政課係長  
知花靖

# 希少動物、ヤンバルクイナを守る 全国初の「ネコ飼養規則」を制定

るが、捨てネコは後を絶たない状況である。

村林道の開設に際しては、ヤンバルクイナや小動物が側溝に落ちても自力で登れるようスロープの取り付けなど、小動物に配慮した工事を実施している。

本村の安田区（人口約二百人）では、ヤンバルクイナなどの希少動物を捨てネコから守ることを目的に、「ネコ飼養に関する規則」を制定している。飼いネコに所有者が分かるマイクロチップの埋め込みと区への登録を義務付けたもので、地域のこのような取り組みは、全国でも初めてではないだろうか。

また、「安田区環境保全基金」を設け、「イヌやネコを捨てないで」「ごみを持ち帰ろう」などを訴えた看板を設置している。

## 野生生物保護センター

やんばるを訪れる皆さんに「ヤンバルクイナ」「ノグチゲラ」「ヤンバルテナガコガネ」をはじめとする希少な野生生物の保護への理解や、関心を深めていただくための普及活動、絶滅のおそれのある野生生物の保護増殖事業、調査研究などを総合的に行うための拠点施設として、平成十一年四月に本村の奥間川沿いに環境省のやんばる野生生物保護センターがオープンした。

同センターには、自然保護官が常駐し、随時、個人やグループ、団体の館内案内および定期的に自然観察会を実施している。また、やんばるの自然を擬似体験できるという特徴のある展示

内容を活かし「環境との共生」「人間と自然との関わり」について、総合学習や生涯学習の教材として活用されている。

今、新たな観光形態としエコツーリズムが全国的に注目されている。国頭村の自然、文化資産の保全と次世代への継承を掲げ、その活用を目指すことによって観光振興を推進し、新たな産業や雇用創出で地域社会への貢献を図ることを目的に、三月に「国頭村ツーリズム」協会を設立した。現在、資源調査をはじめ、人材育成講座、エコツアーガイドなどを実施しており今後、都市との交流などによる波及効果が期待される。

## 自然環境のもつ価値

本村の自然環境はその立場によって異なる。世界的に環境問題、貴重種や希少種への関心が高まったことによって、国民的な視野から、本地域は貴重な動植物の生息生育地としての重要性が高まっている。

また、県民にとっては、貴重な動植物の生息地としての価値とともに、日々の生活に必要な水資源の大部分を依存する水瓶として環境に対する思いが高い。

一方、地域住民から見た評価は地域外部からの視点と必ずしも一致するものではない。地域住民にとっては、生活の糧を得る場であり、日々の生産活動を営むためのかけがえのない資源であるとともに、「ヤンバルクイナ」など貴重な動植物が生息する環境は、持続的に利活用

できる観光資源でもある。

本村は、昔から林業の盛んな地域であり、山を守り育て都会への建築資材を供給してきた。しかし、雇用の場が少なく都会への人口流出が進み、過疎化、高齢化が進行している状況の中で、どう地域の活性化を図っていくかが課題である。

今後は、開発か保護かの対立ではなく、この貴重な資源を守り、利活用し地域振興に結びつけるためには、村民はじめ国、県および関係機関を含めた「保護する場所」「保全しながら利用する場所」「利用する場所」のゾーニングを設定し、この貴重な自然と共生しながら、地域の発展を目指していくことが重要である。



ノグチゲラ

# 「e-ふるさと構想」について

総務省は(財)地域総合整備事業団と連携して、「e-ふるさと構想」を推進している。

これは、インターネットを使って地域交流などを図る「ネット・コミュニティ」を支援することにより、情報通信ネットワークを活用した新たな地域振興モデルの構築を目指すものである。

平成十四年度においては、具体的な事業に即して検討を進めるため、全国六カ所において

「e-ふるさとパイロットプロジェクト」を選定し、地域総合整備財団による補助などを実施する。

## 1 背景

### 1-1 IT革命の進展と対応

情報通信技術(IT)革命の進展は、わが国の経済社会に大きな変革をもたらしつつある。

総務省では、世界最先端のIT国家の構築を目指したさまざまな施策を推進しているが、「e-Japan戦略」の策定以降、高速・超高速インターネットの利用可能数が、e-Japan戦略の目標を超え、料金も世界最安値の水準になるなど、わが国のIT政策は着実に成果を挙げている。

一方、利用可能数と比べてインターネットの実利用数は低迷しており、今後は、わが国のネットワークインフラをさらに高度化するとともに、電子政府や電子自治体の推進によって高速・超高速インターネットの利用拡大を図るなど、新たな段階のIT政策が求められている。

この状況は、かつて文化行政のかけ声のもと

に全国各地で文化会館が建設されたものの、運営ノウハウの欠如や人材不足などにより、十分な活用がなされなかったことを想起させる。インフラの整備で事足りれりとするのではなく、その活用こそ力を注がなければならない。とりわけ、住民が日常生活の中でIT革命の恩恵を享受することにより、新たな地域振興や人材育成に結びつけていくための取り組みが必要ではないだろうか。

### 2 ネット・コミュニティの胎動

全国各地において、ITを地域振興・地域活性化の手段としてとらえ、個人や企業などのグループが、共通の目的意識をもって自発的にネット・コミュニティを形成、活用する動きが活発化し、地域づくりの新たな取り組みが生まれている。

ネット・コミュニティとは、「地域に根差し

た共通の関心や目標を持った個人や団体(企業、NPO、地域グループなど)が、情報通信ネットワークを通じた活動を行う場」を意味する。代表的な例としては、富山県福光町の「ユビキタウン ふくみつ」(商店街系)、長野県岡谷市の「諏訪バーチャル工業団地」(製造業系)、横浜市泉区の「緑えんネット」(地域住民系)などがある。

これらの事例においては、分散型で、オープン、双方向という情報通信ネットワークの特徴を生かし、行政、企業、市民といった従来のタテのネットワークとは異なるヨコのコミュニティを形成するとともに、地域オリジナルのコンテンツや新しいビジネスを創出するなど、地域のニーズや特性を踏まえた自立的な地域経済・社会の活性化が期待されている。

ネット・コミュニティは、国全体で見ればまだ萌芽状態にあり、自立的、継続的に発展していくために、初期段階での立ち上げや運営面での支援が求められている。今後は、地域振興手段としての、従来のハード整備や企業誘致などの方策に加え、こうした多様なネット・コミュニティに対する支援が、新たな地域振興策とな

る可能性が大きいことから、行政としても、その支援のあり方について検討する必要がある。しかしながら、地域IT関連事業にかかる従来の支援策は、インフラやハードウェアに対するものに傾斜しており、地域振興を目指したアプリケーションやソフトウェア開発に関するものは、必ずしも十分とは言えないのが実情である。

## 2 「e-ふるさとパイロット」プロジェクトの概要

### 1 考え方

「e-ふるさとパイロット・プロジェクト」とは、全国各地で胎動し始めている多様なネット・コミュニティ・プロジェクトのうち、とくに高い地域振興効果が期待されるものに対し、公募を通じて支援・助成をしつつ、実施上の諸課題を研究することにより、情報通信ネットワークを活用した新たな地域振興モデルの構築を図るものである。

その目的は、①ネットを活用した地域振興モデルの構築②地域経済・コミュニティの活性化③ITインフラの有効活用④地域の実情に応じたIT化の推進⑤ポストIT講習の人材活用・育成などである。

### 採択されたプロジェクト

- ① 釧路ビジネスカフェ（北海道釧路市）
- ② おすそわけ.comしらたか（山形県白鷹町）
- ③ 富山・石川まちづくりネットワーク（富山県福光町）
- ④ 「Wa.Wa.Wa.」（知恵の輪、人の輪、地域の輪）（静岡県浜松市）
- ⑤ やましろITビジネス研究会（京都府加茂町）
- ⑥ 特定非営利活動法人シニアネット久留米（福岡県久留米市）

平成14年5月29日  
e-ふるさと推進委員会  
にて選定

e-ふるさと  
パイロットプロジェクト  
のイメージ

### 2 対象プロジェクト

助成対象プロジェクトは、①地域に根差した共通の関心や目標を持つ個人や団体（企業、NPO、地域グループなど）による、民間主導の情報通信ネットワークを通じた活動を活用した自発的地域振興プロジェクトであって②地方公共団体が一定のかかわりを有する地域振興のモデル

#### ふるさと財団

- プロジェクトに対する補助  
＜助成額＞  
上限1000万円/プロジェクト
- 助成対象  
・ハードウェア設置費（サーバー等）  
・ソフト開発・購入費  
・運営費（事務局経費等）
- 調査・研究・啓発

#### e-ふるさと推進委員会

- プロジェクトの進捗状況の把握および評価
- 情報提供・アドバイス
- 今後の本格的展開に向けた検討

#### 総務省

- プロジェクト候補の選定に向けた地方公共団体との調整
- 技術的・財政的支援

となるような先進的なプロジェクトである。

具体的な事業パターンとしては、活動の場によって以下のような分類が考えられる。

- ①生活・地域ネット・コミュニティ系（電子町内会、趣味サークルのネットコミュニティなど）
- ②企業・市場ネット・コミュニティ系（バーチャル工業団地、電子商店街など）



富山県福光町の「ユビキタウン ふくみつ」



長野県岡谷市の「諏訪バーチャル工業団地」

③社会システム・NPOネット・コミュニティ系（シニアボランティアネット、防災ネットなど）

④地域発コンテンツ系（デジタル風土記、地域市民放送局など）

### 3 ふるさと財団による支援

アプリケーションソフトの設計・開発・購入費、サーバーなどのハードウェア設置費、ネット・コミュニティの運営費などを対象として、一プロジェクトにつき、最大一千万円を助成する。

助成対象プロジェクトについては、学識経験者、民間有識者、地方行政関係者などにより構成される「e-ふるさと推進委員会」（委員長・斎藤信男慶応大教授）において、プロジェクトのモニター、評価、情報提供、アドバイスなどを行うこととしている。

## 3 平成14年度「e-ふるさとパイロット・プロジェクト」

### 1 採択の経緯

四月一日から五月十日まで全国から公募した結果、五十六件の応募があった。これらの事業について、ふるさと財団内に設けられた「e-ふるさと推進委員会」において、①住民の参加促進効果②地域間の交流拡大効果③企業活動の促進効果④創造性や斬新性⑤全国モデル性⑥民間推進主体の推進力などの観点から応募内容を審査した結果、図のとおり、六団体のプロジェクトが採択された。

### 2 6プロジェクトの概要

「釧路ビズカフェ」は、地元企業や大学などが参加して、札幌をハブとし、釧路その他をスポークで結ぶ北海道内のベンチャー企業のネットワークを形成する。メール、掲示板、テレビ会議などの機能により、企業経営者や大学生などの交流を通じて起業家の育成を図るとともに、ビジネスアイデアの交換などによって道内の企業連携を促進する。

「おすそわけ.comしらか」は、味が良く安全だが地元で主に消費されている少量多品種の農産物をインターネットを通じて販売（おすそわけ）する。ネット上での調理法、厨房レポートなどの情報交換に加え、産地ツアーなどのリアル交流も展開し、新たな市場を開拓したい生産者と、安心、信頼できる農産物を求める消費者の出会いの場をつくる。

「富山・石川まちづくりネットワーク」は、福光町と金沢市の両商店街の若手経営者グループが、金沢大学研究グループの協力・指導のもと、広域ネット・コミュニティを形成し、GPSを活用したご用聞き便のサービスシステムとも連携を取り、生活応援サイトを運営する。

「Wa. Wa. Wa.（知恵の話、人の輪、地域の和）」は、NPOグループが中心となって、Web上に市民の多様な知恵をデータベース化した「市民の知恵センター」を構築する。多様な市民、NPOグループと意見を交換したり、

情報交換の場を提供し、地域の教育力の再生、循環型社会の構築、高齢者の生きがい創出などの地域課題の解決に役立てる。

「やましろITビジネス研究会」は、京都府南部地域を一つの広域舞台として、従来、交流が少なかった研究都市エリアと農村エリアを「京やましろ合衆国」というバーチャルな世界に再構築し、エリア内の商品、情報、産学官による取り組みなどを紹介する。

特定非営利活動法人「シニアネット久留米」は、筑後川流域の貴重な歴史的・文化的資産などの「お宝」をデジタルデータ化し、後世に継ずるとともに、観光資源として活用する。併せて、流域のシニアグループのネットワーキ化、地域間交流の促進を図る。

### 3 今後の取り組み

e-ふるさと推進委員会においては、各プロジェクトの進捗よく、成果などの報告を踏まえ、どのようなネット・コミュニティの活動が、どのような地域振興効果に結びつくのか、どのような支援が考えられるかといった点を、調査・検討していくこととしている。

総務省においては、この調査結果を踏まえ、「e-ふるさと構想」に基づく支援のあり方を検討することとしている。各市町村におかれても、この機会に、地元におけるネット・コミュニティの動向に注意を払い、サポートや連携の方策などについて検討いただきたい。

# アジアで初の 世界砂金掘り大会 男女ともスウェーデンが優勝

砂金掘りの技術を伝承し、各国のまちおこしを基本に、人種差別やイデオロギーを超え世界平和を願う「二〇〇二年世界砂金掘り大会」が八月二十六日から九月一日まで、北海道浜頓別町のコハクチョウの飛来地、クッチャロ湖畔特設会場で開催された。アジアでは初めてで、十六カ国から約三百人が参加した。

日本は、一九九三年のフィンランド大会から参加し、四年前開催されたアメリカ・コロマ大会において浜頓別大会が決定した。

## 日本最大の砂金塊

浜頓別町は日本最北端の稚内市から九十キロほど南に位置する酪農と漁業の町だが、砂金の歴史は古い。明治三十一年に砂金がウソタンナイ川で発見されてから百年以上たつが、この間三度にわたってゴールドラッシュを巻き起こした。同三十三年には七百六十九坪と日本最大の砂金塊が見つかった。現在でも同川では少量ながら砂金を採取できる。町は体験施設としてウソタンナイ砂金採掘公園を整備し、毎年約三万人もの観光客が訪れる。

浜頓別大会はこうした歴史をもつウソタンナイ川を広く世界に紹介するとともに、昔ながらの「ゆり板」を使った技法を体験することにより、日本の文化に触れ砂金掘り技法を伝承するのが狙い。

また、浜頓別町のみならず、過疎化が進む宗谷管内において、交流人口を増やし、観光産業の充実を目指すとともに、地域活性化に寄与し、国際親善の一環を担う役割もある。併せて浜頓別町町制施行五十周年・開村八十五周年の記念事業の一環として開催した。

大会に向け一年半前から実行委員会を結成し準備を進めてきた。

昨年は、世界砂金掘り大会のプレ

大会と位置付けての全日本砂金掘り大会を世界大会の会場クッチャロ湖畔特設会場で開催し、世界大会の周知や伝統的砂金掘り競技の保存、伝承を図ってきた。

世界大会は、八月二十六日から二十七日にかけて、浜頓別町のウソタンナイ川、隣の中頓別町のペーチャン川で砂金掘り体験、砂金シンポジウム、ウソタン砂金地百年記念碑の除幕式を開催した。

二十八日は、各国の民族衣装や特徴的な衣装を着たインターナショナルパレード、開会式、ウェルカムパーティーを行った。あいにくの雨にもかかわらず多くの人が参加し大変盛り上がった。

二十九・三十日には、世界各国から集まった三百人による砂金掘り大会の予選およびチーム戦が行われた。

競技は、(個人戦) 子供の部、ジュニアの部、男子初心者部、女子初心者部、男子ベテラン部、女子ベテラン部、シニア部(団体戦)、オープンチーム戦、ナショナルチーム戦に分かれて実施した。

## 日本文化にもふれる

競技は、会場内に特設された競技マスで、バケツに入った砂の中から、

主催者が予め混入した一ミリの砂金粒を、選鉱パンという器を使って制限時間(二十分)内にいかに早く、正確に見つけ出すかを競った。

三十一日は準決勝、九月一日には決勝戦が行われ、男女ベテラン・ナショナルチームの部ともスウェーデンが優勝した。

大会は、浜頓別町民はもとより管内の市町村、全国の関係者や参加者の協力により成功裏に終えることができた。また、多くの外国人の方が華道・茶道・習字などの日本の文化に直接触れて、多くの日本人と触れ合うことができ大変意義のある大会となった。来年の大会はスイスで行う。

今後は、ウソタン砂金地の遺産を広く世界に発信し、砂金掘り体験観光の推進を図るとともに、広域連携しながら地域一丸となった取り組みを今後の地域づくりに活かしていきたい。



浜頓別町企画調整課主事  
**岩本宏一**



# まちづくり株式会社 3C(サンシー)が誕生

池田は、大阪の中心部から車でわずかに二十分の距離にある、緑豊かな五月山や猪名川の清流など自然環境に恵まれたまちである。

古くは、植木、木炭など生活物資の集散地として、また、畿内の醸造業の中心地として栄えた。

日本最初の分譲住宅があるほか、インスタントラーメンが開発された「事始め」の地である。

池田は、閑静で暮らしやすいまちと活気のある商いのまちを両立させ発展してきたが、人口は十年前からほぼ十万人と横ばい状態。商店街に空き店舗が見えるなど、既成市街地の空洞化が進みつつある。

## まちの活性化を目指す

市内商工業団体などの若手を中心とする「池田市活性化研修会」は平成九年三月に地元が一体となって、まちの発展や商工業の活性化などに

取り組むため「池田まちづくり会社(仮称)」の設立を打ち出した。

また、池田商工会議所は、平成十三年三月に策定した「池田市産業振興ビジョン」で「まちづくり会社」を民間主導で設置し、地域に密着した施策の実施をうたった。

池田市も倉田市長が平成十三年度の施政方針で、中心市街地活性化基本計画の策定と「いけだまちづくり会社(仮称)」の設立に向けて取り組みむことを明らかにした。

こうした経緯を踏まえ、十三年五月、市と商工会議所などがまちづくり株式会社検討委員会を設置。

一年近くわたる検討の結果、地域の活性化を実現するため市民、各事業主、商工業団体、行政などが幅広く参画し、それぞれの特性を発揮することが必要であり、お互い連携してまちづくりを推進する組織が必要であるとの考えに至った。

この組織は、①変化する社会経済情勢に機動的に対応すること②十分なコスト意識と消費者のニーズをと

らえる感覚を持って経営すること③幅広い参加(出資)を得ること、が必要であり民主導の株式会社が必要とし、市一千万円、池田商工会議所が三百万円出資することとした。

十四年七月三日、まちづくり会社設立に向けて、池田市長、池田商工会議所会頭、池田商工会議所女性会会長富坂昭子氏が発起人会を開催。

「新しいまちづくりに挑戦し(Challenge)、まちを変え(Change)、魅力的な(Charming)賑わいを創り出す」との理念で、社名を「いけだ3C株式会社」と決め、出資者を広く募集することとした。

市内事業主や市民を中心として二百二人から総額四千万円近くもの出資申し込みがあり、選考の結果、市内中小事業主と一般市民を優先し、百五十五者とした。

富坂昭子氏



九月二十四日に創立総会を開催し十月一日に設立する。初代代表取締役は富坂氏を内定した。

市民の期待は極めて大きく、いけだサンシー株式会社が果たす責任の

重さを痛感している。

## 3つの事業概要

### ●にぎわい創出事業

- ①歌舞伎、新派、漫才など上方文化芸術の原点・登竜門とされていた芝居小屋「呉服座」(現在は犬山市明治村に移転保存)を復活、活性化させるための文化イベントを企画する。
- ②五月山の桜、がんがら火祭り(伝統の祭)、花火など、既存の観光資源を活かした事業を行う。
- ③ウオンバット(姉妹都市のオーストラリア・ローンセストン市より譲り受けた有袋類の動物)、いらっしやーい(市内在住の桂三枝師匠にちなんだもの)、がんがらなど、いけだオリジナルブランド商品の企画・販売を行う。
- ④ラーメンをテーマにした、新しい事業を企画・展開する。

### ●うるおい創出事業

- ①TMOとして中心市街地整備活性化事業に取り組む。
- ②池田市のホームページやiモードを使った広告掲載・情報提供事業により、市民や事業主のネットワーク化を実現する。

### ●基盤安定化事業

安定した収入確保のため市・商工会議所などからの受託事業を行う。



いけだサンシー株式会社設立準備室  
(取締役就任予定)  
田村智彦

「おい、元気でやってたかあ？」八月一日、東京都港区の虎ノ門パストラルのロビーには、久しぶりの再会を懐かしむ顔があふれていた。

既存の枠にとらわれない独創的な発想のできる地域のリーダーを養成するため平成元年創設された「全国地域リーダー養成塾」。十三年度までに養成塾で学んだ三百八十九人の地域リーダーたちは全国各地で活躍している。

自己啓発や意識の高揚を図るとともに、講師や修了者相互の交流を通じて、ネットワーキ化を促進するため「修了者研修会」を年に一度開いており、今年は八月一、二の両日虎ノ門パストラルで開催された。

九回目となった修了者研修会は、第十四期の現役塾生の集合研修と合同で行われ、約百人が参加した。

**研** 修会初日は、六つのグループに分かれ、テーマごとに分科会を開き白熱した議論を展開した。

分科会はいずれも新旧の養成塾講師が担当した。テーマは大森彌塾長（千葉大学教授）が「市町村合併と地域自治の充実」、森巖夫前塾長

全国地域リーダー養成塾



## 修了者研修会開催



（明海大学教授）が「分権時代における地域リーダーの役割」、宮口侗

勉前主任講師（早稲田大学教授）が

「緊縮財政下の地域づくり」、岡崎昌

之前主任講師（法政大学教授）が

「地域から考える産業振興」、北沢猛

主任講師（東京大学助教授）が「都

市の再生を進める多様な主体の協働」、小田切徳美主任講師（東京大

学助教授）が「農山村地域の内発的

発展」と、いずれも地域が直面する

諸課題。修了者と塾生は講師の指導

のもと、より具体的なまちづくりの

ヒントを得ようと、それぞれの地域

の実情に照らして活発に意見を交換

した。

**研** 修二日目は、株式会社女性生活研

究室代表のみまかなざりかさん

と、岐阜県古川町観光協会顧問の村

坂有造氏、同副会長の柳七郎氏との

対談形式で「町づくりは人づくり」

と題した講義が行われた。自分たち

のふるさとを守り、生かそうとする

高い住民意識に根差した民主主体、民

主導のまちづくりは、地域づくりの現場で働いている多くの参加者が掲げる理想の形につながるものであったようだ。

**初** 日の夜、修了者、塾生、講師

陣を交えた全体交流会が開催され、会場のあちこちで会話の花が咲き、地域、期別を超えた交流の輪が広がった。

会の半ば、期ごとに壇上に上がり、地域づくりにかける思いをそれぞれ発表した。

第十一期の参加者からは、昨年十二月に亡くなられた同期生で、兵庫

県家島町の前田太さんを偲ぶ追悼記

念誌を同期全員で作成したことが紹

介され、志半ばでこの世を去った友

人のためにも、地域づくりに悔いの

ないように取り組んでいきたいと決

意を述べた。

**一** 日間という限られた日程の中

で、参加した修了者たちは、

新しいネットワークを築くために語

り、新たな知識を得ようと耳を傾け

た。そして、多忙な日常の中で消え

入りがちな情熱に「あのころ」の輝

きを取り戻してまた、ふるさとへと

帰っていった。

（財）地域活性化センター研修交流課

副参事 清水雅博

# 広がり見せるネットワーク

第17回  
地域づくり団体  
全国研修交流会

## 宮城大会

全国各地で地域づくりに携わる五百人以上の人びとが宮城県に集い、八月三十、三十一の両日、「第十七回地域づくり団体全国研修交流会 宮城大会」が開催された。主催は、地域づくり団体全国協議会、宮城県のほか、同県内の数多くの地域づくり団体が協賛団体として参画した。

# かくありたい、 仕掛人たちの明日づくり



今大会のテーマは「かく

ありたい 仕掛人たちの  
明日づくり」。宮城県は全

国でも地域づくり団体数が多い、地域づくりの活動が盛んである。各団体の活動内容も多様で、運営組織も歴史文化を守る会あり、ボランティア団体あり、市民活動団体あり、特定非営利活動法人（NPO）ありとさまざまである。

また、地域の企業や行政などが地域づくり活動を支援し、連携・交流を深めることによって、地域を支え、地域の活力を引き出す力となっている。そういった姿を全国の仲間に見てもら

堂において全体会が開催された。

## 武者姿に扮した来賓

開会セレモニーは、地元的地域づくり団体である福祉劇団「鶴亀」の「一目千本桜のごとくNPO真つ盛りの地域づくりじゃ」と題した寸劇で進められ、まず、地域づくり団体、ボランティア団体、NPOのこ

となどが、宮城のお国言葉も交えて面白いやり取りで説明された。

一番の見ものは、来賓の方々が武者姿に扮した登場場面。浅野陸奥守史郎役の浅野史郎宮城県知事と劇団のお殿様との軽妙なやり取りに続き、伊達藤五郎成実役に森巖夫地域づくり団体全国協議会会長、片倉小十郎景綱役に田中正昭総務省大臣官房審議官、支倉六右衛門常長役に松

い、共に交流を深めることが、今後の地域づくりの糧になることを願ってこのテーマが決まった。

初日は、仙台市の隣、大和町にある県立宮城大学講

本英昭財団法人地域活性化センター理事長が鎧兜の武者姿で勢揃い、各人が大音声で名乗りをあげた後、「かくありたい」明日づくりについて漢字一文字で、それぞれ地域づくりについて思いを語ってもらった。

浅野知事は「誇」「地域づくりに大切なことは、その地域に誇りをもつこと。それぞれが誇りをもって活動してほしい」、森会長は「遊」「人間らしくゆとりのある社会づくりが必要。それには遊びのところが大切である」、田中審議官は「活」「地域の方々が、地域の資源を活かし活力をもつて地域づくりに邁進していただきたい」、松本理事長は「創」「新しいものを創りだすことは発展の源泉、クリエイティブな人、クリエイティブな組織づくりは、社会があるべき姿である」。

引き続き、手話サークル「白石しらゆり会」の手話による合唱の披露や「杜乃紫雀隊」・「宮城大学娘すずめ」による雀踊りでセレモニーはクライマックスに達した。セレモニーの最後には、次回開催地の岡山県の方々が壇上から宮城大会に負けない大会にしたいと抱負を語った。また、開会セレモニー中、聴覚障害者のために、手話通訳者とOHPを用いた要約筆記通訳によるセリフの紹介が

行われた。

## 分科会14力所で

閉会后、県内十二市町（栗駒町、高清水町、石越町、登米町、志津川町、田尻町、石巻市、仙台市、柴田町、蔵王町、白石市、丸森町）に分かれ、全部で十四の分科会が開催され、仙台では三つの分科会が行われた。

そのうちのひとつ仙台地域C分科会では、「学者とNPOのパネル・トーク」コミュニティビジネスが地域を変える」と題して、宮城県内で地域NPO学会を開催している大滝精一東北大学経済学部教授をコーディネーターに迎え、山田晴義岩手県立大学教授、木村孝NPO法人不忘アザレア理事、渡辺祥子NPO法人ゆうあんどあい理事長、矢崎英喜岩泉町農政課長補佐がパネラーとしてそれぞれの取り組みの経験や現状などについて発表した。

とくに木村氏は、企業、行政が運営を手放してしまった白石のスキー場の運営を受託、見事に経営を軌道にのせた話を披露。矢崎氏は公務と離れて自主的に活動している「よつてけ市場」（河川敷を利用した、地場の農産物の直売やそれら地元産の食材を使用する食堂を開設し、地元

主婦たちが会員となって運営、売り上げを分配するコミュニティビジネス）について語った。渡辺氏は自分が携わっている居宅支援および訪問介護などの地域の助け合い活動について話すなど大変参考になる報告であった。

山田教授は「地域固有の資源を活かすことがコミュニティビジネスの成功の秘訣である」と述べ、最後に、コーディネーターの大滝教授が「コミュニティビジネスを成功させるためには、地域の顧客との間でうまく相互関係をととりつつ、ネットワークをはかることが大切である」と締めくくった。

## 趣向凝らした交流会

初日の夜は、分科会ごとに、それぞれの地で交流会が開かれた。会場ごとに趣向を凝らした催しものや宮城の郷土料理が振る舞われ、参加者は皆楽しい時間を過ごした。そのうち仙台地域の交流会は、三分科会合同で勾当台会館で行われた。地元のコミュニティFMのDJの司会進行により、雀踊り、ジャズ演奏、みちのくよさこい踊り、パークセッションによるパフォーマンスとさまざまなアトラクションが披露され、参加者も出演者も全員一体となって大いに盛り上がった。

大会二日目は、それぞれの分科会で、日頃の団体活動の報告や、現地での体験学習、町並み散策などが行われた。仙台地域は合同分科会として、「みやぎNPOプラザ」を会場に、仙台市およびその周辺部の地域づくり団体の活動報告会や、作品などの展示・即売を行う「見ていいん」地域づくり団体・NPO団体手作り文化祭を開き、参加者は活動内容について質問したり、今後の地域づくり活動について意見交換を行うなど、地元の地域づくり団体との交流を深めていた。

## 次回は岡山で

この二日間にわたる研修交流会



は、宮城の「おだずもっこ（ひょうきんで、周囲を明るく元気にさせるの意）」な者たちが、地域の仕掛人となって地域づくりに励んでいる姿を、全国の仲間たちに見てもらい、多くの共感と交流をはぐくんだことを実感した。まだ日中は残暑が厳しいものの、秋の気配が感じられる宮城の空の下、参加者の熱気があふれる大会であった。

「地域づくり団体全国研修交流会」は年二回開催されており、次回の岡山大会は、来年一月十六日（木）、十七日（金）に開催の予定。

（財）地域活性化センター 研修交流課  
副参事 千葉義樹



秋田県は男鹿半島にある男鹿市で一風変わった取り組みを進めている団体、NPO法人「なまはげエリア創造委員会」を訪ねた。秋田と言えば、きりたんぼや稲庭うどんなどの食以外では何を連想されるであろうか。おそらく「なまはげ」も上位にランクされるのではないだろうか。年末になると鬼に扮した大人が各家庭に上がり込み、「泣ぐ子はいねえがあー」と怒鳴りながら小さな子供を泣かせて回るといふ光景がよくニュースで紹介される。だからなまはげはすぐ連想できるが、団体名に「なまはげエリア」とあることから、秋田にはそういった地域があるのだろうかと疑問に思ったことが、この団体に興味をもったきっかけである。

## 一市二町がエリア

団体の事務所を中心メンバーの方々に話を聞いた。早速「なまはげエリア」について尋ねてみると、男鹿市内のみならず、なまはげ文化の伝承に取り組み、同市に隣接する若美町、天王町を含めた地域をなまはげエリアと称しており、このエリアを中心に活動を進めているとのことだが、この呼称はまだ広くは知られていないという。

秋田県男鹿市.....NPO法人なまはげエリア創造委員会

地域づくり団体探訪

Series

# なまはげをキーワードに まちの振興図る 文化資源の保存、普及など三事業を展開

団体の主な目的は、地域のシンボルであるなまはげをキーワードにまちの振興を図るといふもので、地域の文化資源の保存・普及のほかに未来へ向かって新しいものを生み出していきたいということから、創造委員会としている。

団体の発足は、平成八年に男鹿市



観光ガイド

## なまはげの出前

観光協会が観光ガイドボランティアを募集したことが契機となつていく。このときに集まったメンバーが観光ガイドをしながら、地域を活性化させる活動に広げていこうと団体の組織化を計画し、十二年五月にNPO法人格を取得して活動をスタートさせた。組織をきちんと整え、信頼される団体を目指し、NPO法人として活動することを選択したという。

ここでは活動の内容として代表的なものを三つ紹介したい。まず一つめは「なまはげ楽座」というなまはげの出前である。これは、古くから伝わるなまはげという地域文化を継承し、さらに地域外へも広めていくというものである。地元の幼稚園や小学校、結婚披露宴などと要請に応じてなまはげの実演の出前を有料

で行っている。園児などに対しては、実演だけでなく、紙芝居によってなまはげにまつわる伝説を分かりやすく紹介することもある。

団体の事務所にはなまはげの扮装道具やなまはげ紙芝居などの道具が所狭しと置かれている。実際に、園児などに見せるものと同じ紙芝居を見せてもらったので、以下になまはげ伝説について簡単に紹介する。

昔、村の娘をさらうなどの悪さをする鬼に業を煮やした村人がその対策について知恵を出し合った結果、鬼にある条件を出すことにした。その条件とは、明日の朝まで千段の石段を積むことができたなら鬼の悪事を許すというものであった。鬼はせつせと石段を積みだいき、夜明け前に九百九十九段まで積み上げ、あと一段というときに村人は一計を案じ、一番鶏の鳴き真似をして鬼に夜が明けたと思わせた。鬼は出された条件



結婚披露宴へのなまはげの前

を果たすことができなかつたと思ひ込み、腹いせに杉の木を地面に逆さに突き刺して逃げて行ったという。

現在も男鹿市には赤神神社五社堂に通じる九百九十九段の石段があり、かつては逆さに刺さった杉の木も実際にあったという。怠けているとこのような怖い鬼がやってくると言われるようになり、いつしかなまはげは鬼ではなく怠け者を懲らしめる神としてあがめられるようになった。

ちなみになまはげとは、働かずに囲炉裏にばかりあたっていると足のすねにできる「なもみ」を剥ぎ取られるという「なもみはぎ」からきている。現在のなまはげも幼い子供がい

る家ばかりを回るのではなく、大みそかに各家を回り、一年の悪い出来事などを振り払い、来年は良い年になることを願うての年中行事だそうだ。

## イベントの企画

団体の活動の二つめは、なまはげにちなんだイベントの企画である。ここでは平成十三年（二〇〇一年）に開催した「たいまつアート」を紹介する。これはたいまつを男鹿市内の寒風山という山の斜面に立て、な

まはげの顔をたいまつで描き出すというものであり、今年も引き続いて実施する予定である。この年は二〇〇一年にちなみ二〇〇一本のたいまつを縦横二百材の範囲にわたって立て、手分けして一斉に点火するとなまはげの顔が浮かび上がり、遠く離れたところからでもはっきりとその様子を眺めることができたという。

たいまつに火が灯っているのはわずか十分程度だが、工夫を凝らしたなまはげの顔のデザインやたいまつ製作、会場の準備などには長い時間と手間がかかっている。

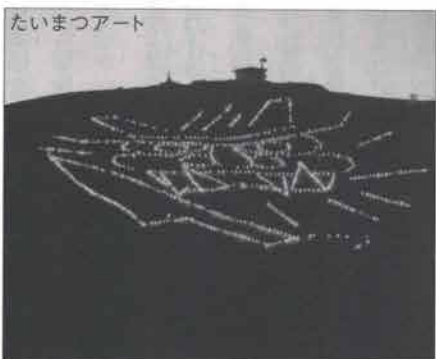
しかしどんなに苦勞をしても、ずっとこのイベントを継続していきたいという強い思いが

団体にはある。「なまはげエリア」も他の多くの地域と同様に人口の流出、過疎化が問題となっている。たいまつアートを実施することによって、たいまつをなまはげを目に焼き付けた若者が、一度はまちを離れても故郷を思い出して再び戻ってきてほしいという願いが込められているのである。

## 悩みのガイド派遣

団体の活動の三つめは、男鹿半島に数多く存在する文化資源の魅力を観光客に分かりやすく伝える観光ボランティアガイドの派遣である。すでに紹介したように、もともとは観光ガイドが集まってできた団体なので、この活動にはとくに力を入れている。しかしながら、目下の悩みは、ガイドの担い手が少なくなってきたることだという。ガイドは無償のボランティアということもあ

って観光客などに人気が高く、ガイド派遣の申し込みが多いときは対応しきれないこともあるという。ガイドの育成のために研修会を開催し、遠くから男鹿を訪れた人びとに男鹿の魅力を十分に伝えるための知識と技を伝授している。



たいまつアート

●NPO法人なまはげエリア創造委員会プロフィール  
●設立年＝平成12年 ●代表者＝佐藤ミチヨ ●会員数＝30人  
●事務局連絡先＝〒010-0341 秋田県男鹿市船越字前野2-6 ☎0185-35-4060

団体の代表者で、時には自らも観光ガイドを務める佐藤ミチヨさんらに短時間ではあるが数カ所を案内してもらった。おそらくガイドがなければ景色を見ただけで立ち去ってしまうたのではないかと思うが、熟練したガイドのおかげで、ガイドの役割の大きさを実感した。

たとえば、前述したたいまつアートの会場である寒風山には、斜面に一カ所だけ数本の松の木が生えている。何も知らないと、それらの木がなければ一面に芝が敷きつめられたきれいな芝山であり、またイベントの邪魔にもならないのではと思うところである。しかし話を聞くと、以前に大きな地震が起きたときの震源地がこの山だったそうであり、そのときに亡くなった方の慰霊碑があの松の木で囲まれているのだという。

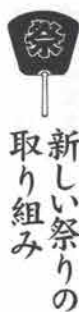
なまはげエリアを創造する活動はまだ始まったばかりであり、成果が表れるのはまだまだ先になるという。しかしながら、自分たちの取り組みが必ず花開くと信じ、より一層元氣な地域を創っていくようとみんな意欲満々である。

（財）地域活性化センター企画調査課  
副参事 佐々木昭弘

地域を  
支える  
女性  
パワー ⑧茨城県古河市

## 古河みこし愛好祭女会 会長 山中久美子さんら

「セヤ、セヤ」「セヤセヤセヤ」。毎年夏になると、茨城県古河市に女性たちの元氣な掛け声が響き渡る。幼稚園児からお年寄りまで、サンバのリズムに乗って腰をふりふり。その後ろから担ぎ手が女性だけの神輿が一基、二基と続く。この祭りの名は「古河おんなまつり」。今回はこの祭りの中心的役割を果たす「古河みこし愛好祭女会」を紹介する。



### 新しい祭りの 取り組み

祭女会の会員は、二十歳代から六十歳代までの女性およそ六十人。市役所の、祭り好きな職員により昭和六十一年に発足した。当時は夏祭りに女性みこしを繰り出し参加していたが、メンバーの中から、祭女会は市民中心の任意団体にすべきという意見が出たことをきっかけに、平成四年に組織改革を行い、現在に至っている。

改革に伴い、今後の活動について話し合いを重ねたところ、従来の行

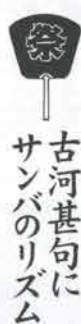


前列右が山中会長

政主導型の祭りから脱皮して、女性の手で祭りそのものをつくろう、という声が上がリ、新しい祭りづくりに取り掛かった。

それではどのような祭りにするのか。古河市には「古河市民号」という、重さ一トと担ぎ手が五百人も必要な日本最大級の神輿がある。いくら女みこしが粋で華麗といっても、それだけで市民の目を引くことは難しい。また、女性三世代が参加できる祭りにしたいという思いから、お年寄りから幼い子供まで、気軽に参

加でき、しかも目玉になる催し物が必要であった。そこで目を付けたのが「古河甚句」だ。



### 古河甚句に サンバのリズム

「西に富士山 東をみれば 夫婦姿の 筑波の嶺よ」。この甚句は、同市の中田地区に生まれ、長年盆踊り歌として市民に親しまれてきたものである。メンバーたちは、この甚句をだれでも気軽に口ずさめるようにサンバ調にアレンジしたうえで、神輿を起爆剤として、神輿とサンバを一体化させた新しい祭りの展開を考えた。さ

つそく古河甚句保存会の方々に相談したところ、祭りを通して古河の歴史を伝承できれば、ということでも申し入れに快く賛成してくれた。

まず、アレンジは、祭女会の事務局を務める小久保和子さんのご主人の知り合いがジャズバンドのメンバーだったことから、その人の紹介でプロに依頼した。歌は、たまたま会

員の中に元歌手がいたことからその女性が歌い、ほかはコーラスを担当した。

振り付けは、会長である山中久美子さんが創作した。山中さんが振り付けを創作するうえで最も気を使ったのが「だれでも親しめる振り付けにする」ということだった。「甚句」と「サンバ」というアンバランスな組み合わせだからこそ「親しみやすさ」が必要だったのである。

こうしてできたのが、名付けて「サンバ甚句」。灼熱の太陽をイメージするサンバ調のリズムに仕上がった。

# 女性三世代が参加できる 祭りを創作 神輿を起爆剤に



## 祭りの 開催に向けて

平成五年四月、祭女会を中心に、市民および商工会議所などの代表からなる「古河おんなまつりを成功させる会」を発足させ、実質的な祭りに向けた活動がスタートした。

第一回の「古河おんなまつり 私達の元気がまちのエンジンです」の開

催は七月三十一日。祭りまではおよそ二カ月。この限られた期間で、祭りに向けてやらなければならぬことは数多くあった。何といっても重要なことは、市内の女性にサンバ甚句と踊りを覚えてもらうことだった。だが、果たしてサンバ甚句が市民に受け入れられるだろうか、という不安がメンバーたちの中にはあった。



土・日曜日には市内の小中学校で踊りの講習会を行った。参加者は多いときで八十人もいたが、中には参加者ゼロの会場もあり、講師となったメンバーが近所の知り合いの家を回って参加を呼び掛けたということもあった。講習会は一三日以上、回数にして百数十回も行ったが、主婦でもあるため講習の合間をぬって

食事の用意もしなければならず、時間のやりくりにかなり苦労したそう

だ。このほか、JR古河駅をはじめ上野駅、大宮駅でも駅前を使って踊りを披露するなど、地道な努力により、市民の間にもサンバ甚句が徐々に浸透していった。そして、いよいよ祭りの当日を迎えた。

## 参加者は 予想の倍以上

おんなまつり実行委員会では当初、祭りにおける踊り手の参加者は六百人程度と見込んでいた。しかし、ふたを開けてみると、なんと倍の千二百人の踊り手が会場となったJR古河駅前に繰り出した。これに、三基の女みこしの担ぎ手、そしてスタッフなどを加えるとおおよそ千六百人が祭りに参加した。まさに祭女会の地道な努力が実ったと言える。

午後六時から始まった祭りは女性たちの熱気が渦巻く中、午後九時、無事終了した。参加者からは、従来祭りといえば男が中心であったが、今回は自分たちが主役となり、楽しめた、気分そう快である、など好意的な意見が多数寄せられた。

それでは、従来祭りの主役であった男性陣は家でビールでも飲んでいただけかと思えば、とんでもない。参

加団体のプラカード持ち、そして会場の警備など女性たちが安心して祭りを楽しめるように、裏方としておよそ百人の男性陣が祭りを支えていたのだ。「おんなまつり」とはいつでも、実際は市民総参加の祭りなのである。

## 夏の風物詩として 定着

さる七月二十七日、第十回「古河おんなまつり」が開催された。今年には八十四歳のおばあさんを最高齢に幼稚園児までのおおよそ千二百人がサンバ甚句を歌い、踊った。「女性三世代が参加できる祭り」として、おんなまつりは今や古河の夏の風物詩となっている。また、おんなまつりを通して、従来あいさつ程度の付き合いが、立ち話ができるようになった、などという声も聞かれる。

山中会長が「おんなまつりは貧乏まつり」と言うように、運営面における祭女会メンバーの負担は大きい。が、コミュニティにおけるおんなまつりの果たしている役割は大きい。十回の節目を迎えたまつりだが、祭女会メンバーの「灼熱のサンバパワー」で、今後二十回、三十回と続くことを期待したい。

(財)地域活性化センター業務第一課  
副参事 宮本明人

●北海道

## 北海道 どさんこプラザ

北海道どさんこプラザは、JR有楽町駅正面の東京交通会館にあり首都圏のアンテナショップとして次の業務を行っています。

**道産品の  
展示・紹介・販売・斡旋紹介**

道内各地の特産品を取り扱っています。また、プラザ内の商品などを、首都

圏の流通企業の方などのオーダーに対応して、斡旋、販売を行います。

### マーケティング支援

売れる商品やサービスづくりを支援するため、展示即売コーナーの20%を道内企業から募ったテスト販売品に充てます。

3~6カ月間のテスト期間中に高い評価が得られれば、当プラザでの通常扱い商品への移行も検討します。さらに、テスト販売が終了した商品については、販売情報の分析と問題解決に役立つ道の施策をセットで道内企業にフィードバックし、商品の成功率向上を支援します。また、催事スペースなどを活用し、企業などのマーケティング活動を支援します。

### 観光情報の提供など

地下1階には、観光案内を行う専任の相談員を配置。各地の観光パンフレット、資料を取り揃え、各種観光相談に応じます。そのほか軽飲食コーナーでは、道産品を使ったメニューを低廉な価格で提供しています。



### 売れ筋 Best 5

- ①ソフトクリーム
- ②バタジャが
- ③西山ラーメン
- ④果実の贈物(苺チョコ)
- ⑤バタジャが玉

### Data

設立年=平成11年7月/運営主体=物産部門:  
(株)丸井今井、観光部門:(社)北海道観光連盟/店  
舗面積=316.7㎡/従業員数=12人/年間売上  
高=約5億5000万円  
●所在地=千代田区有楽町2-10-1東京交通会  
館1F・B1 〒100-0006  
●物産部門  
電話=03(5224)3800 FAX=03(3217)0411  
営業=10時~19時30分(年末年始などを除く)  
●観光部門  
電話=03(3214)2481 FAX=03(3214)2483  
営業=10時~18時30分(土曜13時まで、日祝日休)  
●HP=<http://dosanko.plaza.net/top.html>

●青森県

## あおもり 北彩館

今年4月に  
リニューアルオープン

あおもり北彩館は、今年4月にリニューアルオープンした青森県の食と文化満載のショップです。日本一のリンゴを始め、ホタテ、ニンニク、ナガイモなど青森ならではの美味しい特産品約千品目を常時販売しています。中でも人気はリンゴ関連の

商品で、青果以外にも、ジュースやジャム、チップス、せんべい、キャラメルなどたくさんのリンゴを使った商品を取り揃えています。伝統工芸品も津軽塗、ひば製品など素材を活かし、知恵と工夫をこらした品物が注目を集めています。

また、旬の青森県を感じてもらうため、月1回程度、定期的にイベントを開催します。旬の食材や観光の見どころなどを取り上げますので、直接青森県を知るチャンスです。

### 観光コーナーも充実



北彩館には観光案内所も併設されており、四季の観光スポットや旬の味覚などの情報が満載です。各市町村のパンフレットを取り揃えているほか、インターネットでの検索も可能。イベント情報、交通案内、旅行スケジュールの相談など何でもご質問ください。青森からの「りんご色のお嬢さん」が「あomorの雰囲気」でお待ちしています。

### 売れ筋 Best 5

- ①りんごジュース
- ②ねぶた漬け
- ③魚介類
- ④ひば製品
- ⑤たくあん

### Data

設立年=平成14年4月/運営主体=(社)青森県物  
産協会、(社)青森県観光連盟/店舗面積=100  
㎡/従業員数=8人/年間売上高=1億2000万  
円(本年オープンのため、見込額)  
●所在地=千代田区富士見2-3-11 青森県会  
館1階 〒102-0071  
●電話=物産販売03(3237)8371  
観光案内03(5276)1788 FAX=03(3237)8372  
●営業時間=9時~19時(年末年始のみ休)  
●HP=<http://www.aomori-bussan.or.jp>

# 地域だより

## モンゴルに小学生10人派遣 北海道新冠町

新冠町は、海外都市交流事業の一環として町内の小学生十人を八月中旬から一週間モンゴル・ナライハ市に派遣した。新冠町は競走馬の一大産地。また全国から寄付してもらった七十万枚近くのレコードを収納する「レ・コード館」を建設、音楽教育にも力を入れている。

一方、ナライハ市は首都ウランバートル近くの人口二万五千人の農業と牧畜のまち。新冠町では馬と音楽(馬頭琴)が共通することから昨年十月、子供を中心とした町民、文化交流を進める確認書をナライハ市と締結した。

「次世代を担う子供が他国の文化を知り、豊かな国際感覚を養うことが大切」(社会教

育課)としている。

## 市役所内のゴミゼロ目指す 神奈川県海老名市

海老名市は、市庁舎から排出される廃棄物を再利用する「ゼロエミッション」を来年度から実施するため、年度ごとの施策、目標、費用など具体的な立案作業に近く取り組む。

同市は昨年十月、環境ISO14001を取得し一般廃棄物処理基本計画を策定した。市民が出す一般廃棄物を今後、十年間で五〇〇削減することを盛り込み協力を求めたことから、市もこれに合わせ市庁舎内の「ゴミゼロ」を目指すことにした。目標達成年度は平成二十年。

庁舎内ではゴミを十二種類に分別して削減に努めている。昨年度、市庁舎から出されたゴミは約五十一トで、リサイクル率は六〇〇%。

## まちづくり検討で全委員公募 群馬県沼田市

沼田市は、市民が主人公となってまちづくりを推進するため、委員全員を市民から公募する「まちづくり市民参加検討会議」を十月中に設置す

る。全員公募としたのは「市民の生の声を聞くため」(企画課)。

募集人員は二十人で、十八歳以上の市内在住者または市内に勤務する人。検討会議では政策の企画・立案から事業の実施・評価までさまざまな市政運営の場面に市民が参加する仕組みづくりを検討、提言を行う。会議は幅広く意見を聞くため土、日曜日から平日の夜開催する。

## まちづくりは百勇士で 長野県上田市

上田市は、まちづくりに市民の生の声を活かそうと市民百人で構成する「うえだ百勇士委員会」を九月三十日、設置した。戦国時代の名将、真田幸村とともに活躍した真田十勇士と同市がゆかりのあるところから、その十倍にあたる百人の知恵を市政に反映しようとして「百勇士」と名付けた。委員は市内に居住または勤務する二十歳以上の成人を公募と市長の指名で選考。「しらせ隊」(情報発信)、「みつけ隊」(地域資源の発見、保存)、「そだて隊」(人材育成)

など五つの部会に分かれ、自由に議論する自主運営組織とし、毎年六月に提言をまとめる。任期は二年で、一年ごとに半数ずつ交代する。

## 新しい地域特産品を募集 奈良県大宇陀町

大宇陀町は、地域産業の活性化を図るため、新しい地域特産品を十一月下旬まで募集している。

町内在住者の個人か三人以上で構成する団体が対象。募集要件は①町周辺で生産された素材を加工した産品で、食品・手芸・工芸品②年間を通じて供給が可能で、道の駅で販売可能な産品とした。応募産品は、町が委嘱する県、町職員、町民代表で構成する審査会で十品程度を決める。包装紙のデザインなど採用された特産品を商品化するための経費の二分の一以内(個人の場合三分の一以内)、十万円を限度に助成する。

## 蘇った天正遣欧少年 長崎県北有馬町

北有馬町は、天正遣欧少年使節をイメージした人の形のモニュメント四体を町の中心

部の町道沿いに設置した。

同町はキリシタン大名有馬晴信の元領地で、日本最古の神学校「有馬のセミナリヨ」が設立された。四百二十年前の天正時代にセミナリヨの生徒四人が宣教師とともにヨーロッパに向かい、ローマ法皇に謁見した。

町ではこうした史実を踏まえ、セミナリヨを核にしたまちづくりを進めているが、セミナリヨの建物はすでになくことから「イメージアップを図るため設置した」(総務課)。

モニュメントは縦百七十センチ、横六十センチのスチール製で、一体ごと正面左から

一、五、八、二の数字が描かれている。これは少年たちがヨーロッパに旅立った年を表している。夜間はライトアップし、ドライバーの目を引きつけている。このほか、商店街や学校付近など十三カ所にも、セミナリヨ一期生の人数に合わせ計二十二体の小型モニュメントも設置した。





## ● 首長来訪

▼鹿児島県加世田市 川野信  
男市長（8月20日）

## 笑顔がいちばん！ 放送予定

●10月6日  
岡山県笠岡市、総社市  
島の伝統芸能

●10月13日  
茨城県真壁町、美和村  
町並み保存と星の郷

●10月20日  
三重県紀南地域（熊野市・南  
牟婁郡）  
熊野古道の魅力  
「食と古道」①

●10月27日  
奈良県野迫川村、十津川村  
熊野古道の魅力  
「食と古道」②

TBS系、毎週日曜日  
午前7時～午前7時30分  
※一部で放送日時が異なる地域があります。

## 「地域活性化フォーラム in 福岡」10月21日(月) 開催

このフォーラムは、「交流と連携によるまちづくり～21世紀型の地方都市のあり方を考える～」というテーマで、(財)地域活性化センターと福岡県との共催で開催されるものです。お申し込みは所定の参加申込書（センター受付にて配布）または、センターホームページにてお願いします。定員は400人、定員に達した段階で申し込みは締め切らせていただきます。

### ●開催日時

平成14年10月21日(月)  
13:00～17:00

### ●会場

西鉄グランドホテル(福岡市)

### ●内容

講演Ⅰ：西村幸夫（東京大学大学院工学系研究科教授）

21世紀の都市像と新しいまちづくりのあり方

講演Ⅱ：大林宣彦（映画監督）

わたしの好きなまちなみ

パネルディスカッション

〈コーディネーター〉

井上 繁（常磐大学コミュニティ振興学部教授）

〈パネラー〉

出口 敦（九州大学大学院人間環境学研究院助教授）

栗原 孝（福岡県大牟田市長）

今泉重敏（NPO 地域交流センター理事）

残間里江子（プロデューサー、コミュニケーション・プランナー）

### ●問い合わせ先

(財)地域活性化センター情報サービス課  
担当：山辺

TEL：03-5202-6135  
FAX：03-5202-0755

## 会員調査研究機関の情報を センターHPに 掲載します!!

(財)地域活性化センターのホームページ「地域づくり百科」(<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>)に当センター会員の調査研究機関(コンサルタント・シンクタンク)に関する紹介情報を10月15日(火)から掲載します。

内容は、各社の調査手法の特徴などの紹介と平成13年度に市町村などから受託した主な計画策定業務や調査事業の実績一覧です。さらに詳しい情報を知りたい場合は、各社のホームページにジャンプすることも可能です。

自治体の皆さまが、計画策定業務の委託や相談などをされる際に、調査研究機関を探される場合に活用してください。なお、電話やメールによるコンサルタント紹介も引き続き行っておりますので、下記までぜひお問い合わせください。

### ●問い合わせ先

(財)地域活性化センター

コンサルタント業務課

TEL：03-5202-6138

メール：[consul2@chiiki-dukuri-hyakka.or.jp](mailto:consul2@chiiki-dukuri-hyakka.or.jp)

## インターネット・フォーラム による地域づくり支援を 実施しています!!

地域づくりに関する各自治体職員相互の情報交換の場提供や気軽な相談窓口として利用していただくために、メールを活用したインターネット・フォーラムによる地域づくり支援を実施しております。

現在、「住民参加」をテーマに自治体の皆さまから参加者を募り、メーリングリストでの情報交換や意見交換を行っています。その経緯は、(財)地域活性化センターのホームページ「地域づくり百科」(<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>)で、今後随時報告していきますのでご覧ください。

また、他の自治体の方と情報交換や意見交換をしてみたいテーマがありましたら、ご提案いただきますようお願いいたします。なお現在行っている「住民参加」についてのメーリングリストに興味をもたれた方も、下記までお気軽にお問い合わせください。

### ●問い合わせ先

(財)地域活性化センター

コンサルタント業務課

TEL：03-5202-6138

メール：[consul2@chiiki-dukuri-hyakka.or.jp](mailto:consul2@chiiki-dukuri-hyakka.or.jp)

# 第56回全国お茶まつり



## かごしま・颯娃大会

期日 平成14年11月15日(金) 場所 鹿児島県揖宿郡颯娃町・他



### 基本行事

第56回全国お茶まつり式典

日時 平成14年11月15日

場所 颯娃町 町民会館

全国茶品評会

日時 平成14年8月27・30日

場所 かしま茶流通センター

茶産地視察会

日時 平成14年11月15日

場所 颯娃町 他

### 関連行事

第19回全国茶生産青年のつどい

日時 平成14年11月14日

場所 鹿児島市 他

お茶ふるさとフォーラム

日時 平成14年11月16日

場所 鹿児島市

茶葉関連資材等展示

日時 平成14年11月15日

場所 颯娃町 町民会館周辺

南方緑茶文化園で

お待ちしております

### 主催

第56回全国お茶まつり実行委員会

鹿児島県

関係団体

(一)日本茶業中央会

全国茶生産者連合会

鹿児島県茶業振興会

(二)鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

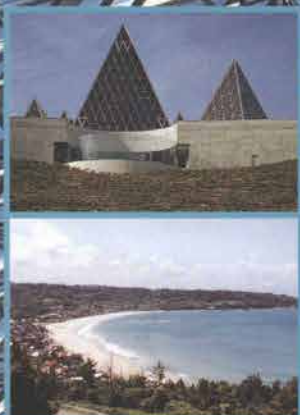
鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会

鹿児島県茶業振興会



## 世界最大の 一年計砂時計と 鳴き砂のある町

山陰島根路の「しおさいロード」(国道九号)沿いに位置する仁摩町に、「仁摩サントミュージアム」があります。冬の日本海の荒波にもまれ幾万年もの年月をかけて形成された「鳴き砂」琴ヶ浜海岸をモチーフに作られ、まろづくりのシンボルとして、また、自然環境保護の情報発信拠点として活躍しています。

大小六基のガラスのピラミッドのうち最も大きいものは高さ二十一メートル、底辺が十七メートル四方もあり、この中に直径二メートル、高さ五・二メートルの世界最大の一年計砂時計「砂暦」が納められています。琴ヶ浜に代表される鳴き砂の浜は日本でも数少なくなってきたっており、自然環境保護のバロメーターとしてこれからも守っていくなければならぬ大切な資源の一つです。平成八年には、鳴き砂のキツキツという音が「日本の音風景・百選」に、その美しい渚が「日本の渚・百選」にそれぞれ選ばれました。

毎日がめまぐるしく過ぎて行く都会のけんそうに疲れたら、一度この浜を訪れてみてください。ゆるやかな砂の流れが、あなたを悠久の時間の流れの中に誘ってくれるでしょう。

## 10月のイベント予定

### ★日本橋プラザビル イベントスペース

10月2日～4日  
物産観光連絡協議会（滋賀県など15県）

10月8日～9日  
女川町（宮城県）

10月11日  
米代川流域地方拠点都市地域整備協議会（秋田県）

10月23日～24日  
五泉市（新潟県）

10月25日・28日  
萩市（山口県）

10月29日～30日  
県南地域地場産業振興対策協議会（福島県）

### ★ふるさと情報プラザ イベントスペース

9月30日～10月4日  
島根県

10月7日～11日  
京都府

10月15日～18日  
函館市（北海道）

10月23日～25日  
和歌山県

10月29日～11月1日  
津軽広域観光圏協議会（青森県）



## 8月実施イベント

### ★日本橋プラザビル イベントスペース

8月21日～23日  
山陰中央リゾート協議会（鳥取県）  
山陰うまいもん市場

8月26日～27日  
鶴岡市（山形県）  
「やまがた 鶴岡 観光と物産市」①

8月29日  
南部川村（和歌山県）  
梅消費拡大キャラバン

### ★ふるさと情報プラザ イベントスペース

7月31日～8月2日  
離島フェア開催実行委員会（沖縄県）  
ミニ離島フェア②

8月5日～9日  
石岡市（茨城県）  
「石岡のおまつり」PR

8月19日～23日  
佐賀県  
佐賀県観光展「陶芸体験と秋のまつりポスター展」③

8月26日～29日  
倉敷市（岡山県）  
おいでんせえ 倉敷へ

## 編集後記

▼今回は各自自治体がそれぞれ誇りとして守っている「宝」を取り上げた。地域によっては何の変哲もないものであってもある自治体ではかけがえのない尊い存在になっている。取り組みも住民が先行し、行政があとから力を差しのべてという例もあり、示唆に富む。

▼北海道の事例は、わが国から姿を消した炭鉱がよみがえったケースだ。国内で唯一操業していた太平洋炭鉱が今年一月三十日閉山した。かつては「黒いダイヤ」と呼ばれ、大きなエネルギー源だった。時の流れで水力、火力、原子力発電にとって代わられての最後となった。しかし、「ヤマの灯を消さないで」との地元経済界を中心とした働き掛けで、五年という期限付きながら採炭を始めた。

釧路炭鉱は採炭だけでなく、中国、ベトナムから計百五十人の研修生を招いて技術指導という任務を持っている。操業期間中に同地区で新たな産業の展開のできることを願ってやまない。

▼自治体が首都圏で展開しているアンテナショップを今回からシリーズで紹介することにした。「ふるさと情報の提供、特産品の販売、飲食」と狙いはさまざま。「費用もかかり運営は厳しい」（某東京事務所長）とか。お客さんの意見は店舗経営のよきアドバイスになる。一度、顔を出されては。（やなぎ）

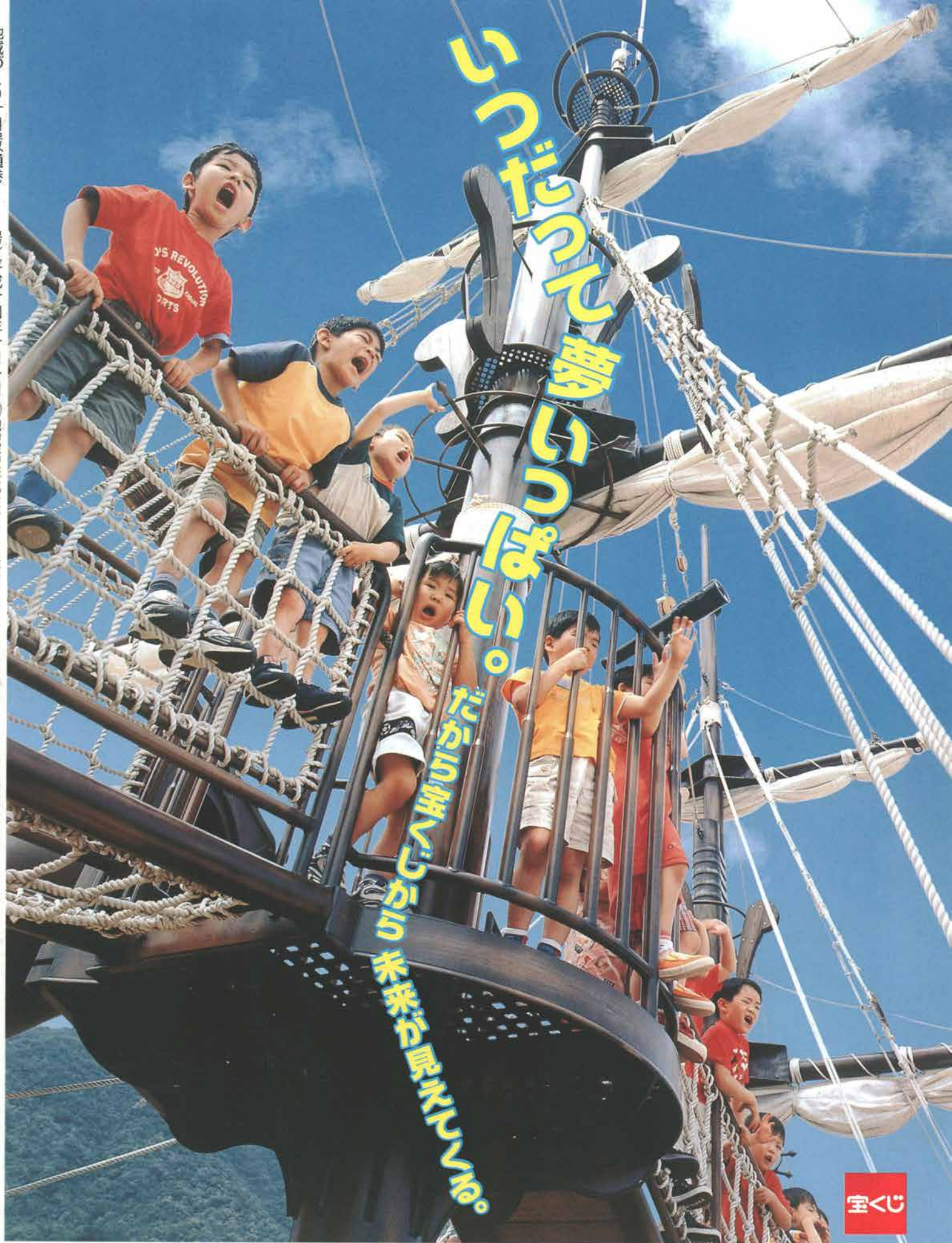
特集Ⅱユニバーサルデザイン

## 地域づくり 10月号

平成14年10月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代） <http://www.chiiki-dukuri-hyokka.or.jp/> 印刷＝大日本印刷株式会社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します。



いつだって夢いっぱい。

だから夢をいじから未来が見えてくる。



宝くじの収益金は、  
身近な街づくりに役立っています。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ  
<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>